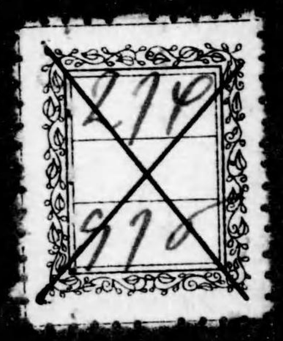
叢書ギカア

くゝりへ処何

作チ ジイウキンエシ

特100

380



始

特100
380

アカギ叢書第四十九編

シエンキウイツチ作

桑山菁々述

何處へ行く

大正
3. 9. 10
内交

何處へ行く

羊を牧ふてローマへ

CAMPAGNA·

アカギ叢書發刊の辭

予往年將に中學を終へて、生涯を捧ぐべき職務を選定する必要に迫らるゝや煩惱之を久うして遂に書籍出版業を得たり。即稍狂熱を有したる文筆の樂を棄て、直に一書肆の丁稚となつて初めて轅を握るや、爾來葱忙の間に既に六星霜を經たり。未だ何等の得る所無きを耻づと雖、當今所謂書籍界の狀勢を見、立志以來の『書籍によりて享受し得べきあらゆる幸福は、必ず之を一般に普及せしめ度し』との信念に至りては、年を經て益々固きを覺ゆ。是予が非才自ら顧みず大正三年元旦を期し、書籍出版業として微を此處に致すべく立ちたる所以也。

當今書籍出版業たる予の最も痛恨に堪えざるものあり。古今東西の科學、藝文にして、誠に珍重すべき內容を有し乍ら、吾國に於る普及の程度眞に微少を極めたるもの之なりとす。原因とすべきもの多々ありと雖、書籍の價高きに過

序言

僕がクオ・ヴアデスを愛讀したのは高等學校に居た時分であつた。其後此の譯本がいくつか出た樣に聞いて居る。然し自分は全く主觀的の感興を中心として紹介したいと思つて居た。で或る場合には原文を離れて自分の昂まつてゆく感情を成るべく忠實に傳へやうと試みに。玆に之を明言してポーランド詩人の名作を諸君と共に讃美したい。そして原文の璧玉を瓦礫にした自分の罪を偏に許して戴きたい。

大正三年七月

二思樓上にて

著者。

る一也。內容難澁を極めたる一也。尨大なるが爲に繁忙の今日、止むを得ず閑却せざるを得ざるもの一也。先づ第一着手として今日アカギ叢書を刊行するに至りたるは、誠に此處に見る所あれば也。卽アカギ叢書は各册を全部金十錢にて提供す。外國語、古代語は、全部通俗にして度に適せる現代語に飜譯す。如何に尨大なる內容をも、妙味を失はざる限り、必ず袖珍百頁にコンデンスす。依つて以て從來專門家、篤學者のみの專實に委したる宇宙の眞理、學術の寶庫の、高價、尨大、難澁の三大門戶を開放して、あらゆる人士の活用に供せんとす。未だ善美を盡さずと雖、予が事業の第一聲としては私に誇りとする所也。希くは大方の諸賢、幸ひに善導を賜へ。

大正三年三月　赤城正藏白

何處へ行く

文學士　桑山菁々述

(一)

豪奢を極めたローマの貴族達は放縱な日を送つて居た。ペトロニウスも昨夜の宴會で今朝はぐつすり寢込んで終つた。日がもう餘程高くなつた時やつと寢床を離れて例の奴隷達に香油を運ばせた。肉付きの好い肌を朝風に思ふ存分吹かせて香油を擦りこむとそれが魂の底まで浸つてゆく樣で又うつとりとする。

所へ甥のヴイニチウスが久しぶりで訪ねて來た。ヴイニチウスは華やかな若者で長い間アジアの方面へ出陣して居たのである。

「叔父さま。御變りもありませんか。」

「いや相變らずさ。

戰爭の話や氣候の話が一通り濟むとペトロニウスは急に氣を更へて

「お前は何かサイプラスの神前に供物を持參したであらうがな。

「その事に就て實はお伺致したのですが。

ヴイニチウスは一寸言葉を切つた。二人は改めて朝湯をつかつた後又その話を續けた。ヴイニチウスは同じ貴族仲間のアウルス・プラウチウスと云ふ人の許に二十日程逗留したことがあつた。此の家にカルリナと云ふ美しいリジア婦人が同居して居た。小鳩の樣な美しい女なので家の人は皆リジアと呼んで可愛がつて居た。リジアが庭の泉水で曉の光を片面にうけ乍ら沐浴する時は丁度ヴイナスの神が今しも水沫の中に立ち上つた樣に神々しい姿であつた。ヴイニチウスはそれを見てから若い血潮が一度に燃え立つたのである。

「私は羅馬から何んにも酬いられずとも好い。寶玉も眞球も何の酬になりましよう。私は只リヂアが欲しいのです。

「その女を買つたら好かろう。

と叔父は案外簡單に考へた。然しリヂアは奴隷ではなかつた。或る王の姫君で早くからプラウチウス家に育てられて居たのである。でプラウチウスの妻ポンパニアは殊に可愛がつて自分の子と同じ樣に目をかけてやつた。ヴイニチウスは此の事情をよく知つて居るので一層煩悶の度を高めた。所がペトロニウスは矢鱈に戀の說明をしたりポンパニアの貞節を讃美したりして一向相談の要點に觸れない。いつもならばヴイニチウスも議論に花を咲かせるのであるが心はもうリジアに奪はれて居るので叔父の態度が齒がゆくつてたまらなかつた。が遂々プラウチウスを訪問すると云ふ事に定まつてヴイニチウスは歸つた。

秋霽れの日が幾日か續いた。名もしれない細かい虫が眼まぐるしい程空に舞つて午後の光が大理石の殿堂を鮮かに彩つた。

ヴイニチウスはペトロニウスに供なはれて棕櫚並木の間をプラウチウスの家へ向つたのである。途々ペトロニウスは甥を顧みて

「リジアが奴隷でないとした所で何も心配することは無い。ネロ陛下の命令は

絶體の力であることはお前も知つ居るであろう。

ヴィニチウスはそれでも安心しなかつたと云ふのは彼がプラウチウス家を辭する時リジアと散歩した時の事を思ひ出したからである。其日は美しい日であつた。リジアが例の初々しい面持に少しうるみを持たせて池の畔を辿つて居た。最早お別れしなければならないとヴィニチウスが寄り添ふて挨拶をした時、リジアは手にして居た葦の葉で砂の上へ何やら書いたまゝ突然驅け出して終つたのである。女は男の腕にすがつて媚を呈するものとのみ思ひ込んで居たローマの青年にはそれが奇蹟の樣に思はれた。

「何を書いたのか。戀の女神の名か。

「魚

ペトロニウスにも此の謎は解けなかつた。魚は何の表象であろう。これが解らないのでヴィニチウスの考はいよいよ亂れたのである。斯うして二人は思ひ思ひの冥想に耽つた儘やがてプラウチウスの門前に達した。案内に從つて通さ

れた室々は眩しい程明るい光に充ちて居て百合の花が一杯に咲き誇つた居た。ローマ貴族の邸宅に有り勝ちな眩爛（けんらん）たる趣味と事變りて嚴肅な靜けさが其處にも此處にも現れて居る。

「妙な處だ

と斯うペトロニウスは考へた。

「ポンパニアは何でも東の方の迷信を崇拜して居るそうだ。クリストを信仰して居ると云ふ話だ。

其處へ主人のプラウチウスがいかにも落着いた風彩で出迎へた。世馴れたペトロニウスもすぐ微笑を洩してお互に心おきなく座に着く、客間のカーテンが引き上げられると庭は一目に眺められて子供達の樂しい笑ひ聲と花の香を競ふ蜜蜂の羽ばたきが長閑な日を一層鮮やかにした。植込を透して眼をあげると其處にはリジアと少年アウルスとが鞠投げに夢中であつた。常春藤（きづた）と葡萄との葉かげに古風な趣きを見せて居る離れ家からポパンニアは今にも滴りさうな愛嬌

を二人の上に注いで居る。少年アウルスはヴイニチウスを見ると無邪氣に飛んで來た。リジアは葉かげから洩れる日の光にまぶし相な面をそむけて百合の花陰に立つて靜かに一禮した。ペトロニウスはその昔ホーマーが唱つた詩の句を引用して美しい讃美の詞を述べるとリヂアはすぐ其の詩の後をついで謝意を述べた。

ペトロニウスは一度その姿の美しさに驚き二度その心の神々しさに驚いた。少年アウルスの誘ふがまゝにリヂアもヴイニチウスも大きな築山を一めぐりして池の上に出た。ヴイニチウスは低い緩かな聲で美しい自然を讃美した。その聲がいつか情熱に煽られて息のせはしくなるのを覺えた。

「森や林の遠くつゞいて居るアジアの天地に追ひやられたのは丁度私の元服して間もない時でした。まだアナクレオンやホレースの詩もよく知らない時でした。それがやがて詩と云ふものに心をひかれ人の世の愛に眼を向ける樣になつて來た。チタスと云ふ若人がヴエロニカと深い仲となつた詩を私は何度

くり返して詠んだろう。富も名譽も權力も醒めて終へば空しい煙にすぎない。私は現實の世界から銀色の翼にのせられて詩の國へ出た。深い薄暗い森の中から朗かな野原へ出た。

藍青を湛へた池の岩かげに泌と耳を傾けて居たリジアの胸は頻りに躍つた。はりつめた縱琴の一つ一つを力强く彈かれてゆく樣にリジアは靜かに耳を傾けて居た。誠に美しいものは詩に生きてゆく男女の愛である。自然はそれを讃美して光榮ある夕陽を二人の上に惜しげもなく落した。日がよほど傾いてから二人は室の中へ戻つた。

ペトロニウスとポンパニアは客間の窓から遙かに夕日の光を眺めて平和な閑靜な經驗を語り合つて居る。ローマの都は富と權力とで何一つ不足はないと思つて居た。ネロ陛下の光榮はローマの市街を金色に彩つて居ると考へて居た。それが此の美しい自然の景色に見入ると嘗て覺えない不思議な力が血脈の中を流れる樣に感じたのである。

「私にはネロ皇帝の支配が此處だけには及んで居ない樣に思はれる。
と斯ふペトロニウスは首をポンパニアに向けて云つた。
「此の世の中を支配する者は神であります。ネロ陛下ではありません。
「なる程、貴女は神々を信仰して居らつしやるので。
「神は唯一人でございます。愛の神が凡てを支配して居ます。それを私は心から信じて居ります。

(二)

ネロ皇帝の嚴命を帶びた近衞兵は百人の長に卒ひられて突然プラウチウスの邸宅を驚かした。ネロ皇帝の綸言(おことば)が凡ての權力と凡ての威力とを含んで居た此の時代には決して稀らしい事ではなかつた。たゞ突然の使命なのでプラウチウスは其の理由を疑つたのである。百人の長は皇帝の印書を被いて
「プラウチウス閣下。閣下の邸宅内にリジア王の姫が寄遇して居らるる旨陛下

の叡聞(おみゝ)に達した。姫はローマの人質として早速宮殿へ御差し出しの程御取計を願ひたい。
プラウチウスは遲かれ早かれ斯う云ふ悲劇の來ることを考へて居た。ポンパニアは幾度か夫に嘆願して見たが皇帝の命令を何うすることも出來ない。哀れな小羊は自由な野から檻の中へつながれなければならなかつた。
ポンパニアは自分の化裝室へリジアを呼んでその美しい頸へ熱い涙を注いだ
やがて靜かに體を擡(もた)げて
「主の試みの時が今來たのです。荆(イバラ)の冠を今あなたは被(かぶ)らなければならない。多くの血と肉とに飽きて恐ろしい罪に馴れて居るローマの宮殿へ行かなければならない。あなたは今世(このよ)の律法(おきて)よりも一層高い神の律法(おきて)に試みられる時が來たのです。
之を聞いたリジアは涙が胸一杯になつて何も云へなかつた。久しい間育てられた樂しいプラウチウス家を離れて何處に行かう。何處に平和を求めやう、斯う

云ふ切ない愛惜の心は泌々と迫つて來た。けれ共皇帝の命令には一滴の涙もなかつた。凡ての事が腕力で解決されなければ逆殺に訴へるのが當然の成行であると信じて居たのである。ポンパニアはかねて知り合のアクテアに手紙を書いてリジアの行末を呉々も賴んだ。アクテアと云ふのは皇帝の侍女でセント・ポーロの書翰を愛讀して居る熱心なクリスト信者であつた。リジアは此の手紙と四人の希臘婦人を連れて百人の長がすゝめる輿に乘つた輿が純白な大理石の階段を幾つか下りてブラウチウス家の門外へ出た時新らしい涙はまた止め度もなく溢る。ポンパニアも窓の外に立つて痛ましい此の一行を見送つて居たが斯うして百合の花の様な美しい信仰が腐敗した宮殿の中へ植えられるのだと思ふと少しは張合も出て長い間祈禱した。

リジアの小さい時から召仕はれて居た奴隷の中にウルサスと云ふ者が居た。體格のがつしりとした肩の廣いリジア人である。始終默つて居るが信じた事を遂行するに何の恐るる所のない强い心と力とを持つて居た。で人々は熊と云ふ

仇名で呼び習はして居た。今度リジアが愈々宮殿に召さるると聞いて是非御供したいと嘆願した。ブラウチウスはローマ武士の暴逆なるを說いて其の願を止めさせやうとしたがウルサスは自分の腕を擦つて

「わたしは枯枝を折るやうに鐵を折ることが出來ます。

斯うキツパリと云つた。此の一言でブラウチウスは世にも賴もしい者と思ひなして其まゝ默許したのである。プラウチウスは今度の事件がペトロニウスの密告から生じた事であるとすぐ悟つた。美しい名と勇ましい姿との影にかくれて卑しい欲に馳せてゆくローマ貴族の態度に憤懣の情と輕侮の念とを昂めた。

「此の世に何の神があるか。神らしい神が何處にあろうか。卑怯な暴逆な神が只一つあるばかりだ。ネロ。何と云ふ憎むべき神の名か。

「我が夫。神は愛を支配する只一人の神であります。ネロは神ではありません。

ポンパニアは夫の腕に額を埋めても何も云ふ勇氣を失くした。斯うしてリジアは悲しい物思を小さい胸に疊んでローマ宮殿へ運ばれたのであつた。

宮殿では晝夜を分たず管弦の日が幾度かつゞいた。ネロは最も寵愛の深いポプペアとアクテアとを左右に侍して酒と歌とに盃を離す暇さへ惜しんだ。ポプペアは華美と榮譽とを無上の權威と考へて其のためには血を見るをさへ拒まぬ虚榮の女であつた。アクテアは靜淑な女で他人の涙に同情の出來る優しい女であつた。初めはアクテアの勢力が仲々大きかつたがポプペアの陰險な手段がだんだんに成功して今ではポプペアが一代の寵愛を恣にして居る。それでもアクテアは何一つ不平がましい事も云はずに信仰の生涯に謙遜の美德を養つて居た。これが又皇帝を初め宮廷の人の敬慕をうけた點でポプペアも御し易い婢女として宮中に特別の一室を設けさした程である。

饗宴の夜は眩いばかりの華美と壯麗とで有ゆる階級の人々は只もう夢の世から夢の國へと逍遙した。チゲルリヌス、ヴィニチウスと云つた樣な當代の貴紳名士は美裝のある限りを盡して金色燦たる王座の前に伺候する。白金をちりばめた大理石の倚子には桃色にふつくりと肉付いたエヂプト舞妓が横たはつて居

る。其の腕から垂れたエメラルド、ルビー、種々の寶石が風もなきに幽かな微動を傳へて珊々と鳴る。微動は酒に勞れた胸の鼓動の忙しさから起る。薄い紗の綾羅は乳のあたりを掩ふて腰に終つて居る。胸の鼓動から起る歡樂の微動は綾羅の端にも傳つて床の上に波をうつ。ローマ武士の逞しい體格は酒の香と詩のリズムに溶け込んでローマは常への春であると思はれた。

肉の歡樂と酒の享樂とそれ以外に何等の權威のない樣な宴會へ出席するのはリヂアの堪える所でなかつた。アクテアはその信仰に厚い態度に同情してさまざまに慰めた。

「リジア樣。あなたは自分の信仰の爲め自分の權威のため御宴會に欠席なさる御心は私によく解つて居ります。けれどもネロ陛下はあなたに姪がましい事を强ゆる爲めに御呼び寄せしたのではありますまい。其れは御安心なすつて大丈夫と存じます。

「と申しますと。

「さ。考へて御覽遊ばせ。御殿では今ポプピア様が御世繼を生んだので陛下はもう其の嬉しさにお狂ひなさる程。他の女に心を配る餘裕も無いやうに見受けます。あなたも何誰かにお願して見たならば再びお還りになれぬとも限りませぬ。ペトロニウス様ならば……

「私をこゝに御呼びなされたのはペトロニウス様の御差圖ですから……それは適ひますまいと存じます。チタス様では

「いえ。あの人達では陛下の御機嫌を損じるばかり。

「セネカ様では

「いつもの皮肉が邪魔をして覺束ない様に思はれます。

リヂアは殆んど當惑して終つた。後園の植込から片明りする夕日がアクテアの美しい肌を滑つて餘光ゆるやかにリジアの髪の毛に震えた。絹糸を練つた様な髪の毛の一筋一筋に反射する光が翡翠の様な輝をなして青ざめた頰の色をほんのりと染めた。リジアは赧らむ面を伏せて

「ではヴイニチウス様では

「其の方は

「ペトロニウス様の甥御で居らつしやいます。

「お取り做し下さる様な當でも御座いますか。

「はい

「それは結構。では是非宴會の席へお出で遊ばせ。其の席で御願ひなされては如何ですか。あれ何と云ふ喧騒なのでしよう。金盃の搖れる音、寶石の觸れる響。もう食卓の用意も出來たやうでございます。さ。御一緒に參りませんか。

ヴイニチウスはリジアが御殿に召されたと云ふことを聞いて自分との緣を斷たれたものと思ひ込み一度は大に怒つたが。ペトロニウスの計略であることを知つてからは日毎夜毎の饗宴が待ち遠しくつてたまらなかつた。その日も早くから參内して大廣間の階段に夕日の沈むのを何度か打ち眺めて居た。

アクテアは自分の化粧の間でリジアの身仕度に忙しかつた。水晶に薔薇の花

を包んだ様なリジアの肌を眺めた時希臘生れのアクテアには只もう古い女神の彫刻に血が通つて來た様に思はれた。ポンパニアの家で嚴格に育てられたリジアは女のたしなみは貞淑と謹嚴とにあるとのみ教へられて居たので自分の肌の美しさを味ふと云ふ様なことは一度も考へた事も無かつた。やがてリジアの髪に金の粉を振りかけてからアクテアはさも感歎に堪えないやうに、こんな美しい人を生んだリジアの國はどんなに美しい國でしよう、と云つた。リジアはウルサスがよく話す故國の噂をくり返して森の繁つた淋しい野山のことを語つた。

斯うして思はずも永い化粧の時を過した後に二人は轎に乘せられて大廣間の玄關に着いた。

質朴な神々しい建物に馴れて居たリジアは黄金ちりばむ大理石の華麗な宮殿に暫くは驚きの眼を張つた。圓柱から圓柱へ絶え間なく往來する燦たる宮人の忙はしげな足音に吸ひ込まれて行く如くリジアは恍惚として階段の上に立つた。何か待つ人でもある様な心持で廻廊の彼方を望んだとき思はず面を染めた。今

しも丁度食堂の方へゆるやかに歩を運んでゆくのがペトロニウスとヴィニチウスであつた。見も知らぬ大勢の賓客の中で此の二人を見出したとき只何とは無しに重荷を下した様な、そして自分の心をひきしめて呉れる様な、輕い喜びが胸を突いて起つたのである。

食堂の内は幾千の燈火のゆらめきと人いきれで濃霧のやうに霞んで居た。樂の音と香料の嗅が初々しい神經をいたく昂めてリジアは昏醉の感じに陷つたのである。アクテアの腕に倚つたまゝ暫くは胸の鼓動を押へやうと努めた。

「美しきカルリナ様。よくお出でになりました。

上衣を輕く裝ふたヴィニチウスはリジアの側に來た。兩腕にはめた金の飾が痛い程眼を射る。前額から後ろへ斜めに被つた薔薇の冠は燃えたつ筋肉にしつくりと調和して居た。リジアは昂ぶる鼓動を辛くも靜めて輕く會釋した。四圍には誰も接近して居ないことに氣の付いた時自分の身に襲ふて來た奇しき成行を語つた。ヴィニチウスは知つて居るだけの事を皆話した。御殿に居惡ければ

いつでも去るが好い。自分はリジアの爲めに祭壇を設けて待つて居る。世界のあらゆる幸福はリジアの笑顔に集つて居る。斯う云ふ心持を打ち明けた。

今迄嘗て覺えたことの無い歡喜の情がリジアの血の中を走つた。それが饗宴の騷々しい樂の音とアラビヤ香油の高い香とに刺戟されて急に芽ぐんで來る樣な氣がした。弱々しい耻しさに包まれた淡い歡樂が少壯にして逞しいヴイニチウスの腕に搦んでゆくと云ふ潛在の意識がリジアの胸一杯に擴がつた。ヴイニチウスは炎々たる至誠の愛に堪えられなくなつて身體中の血管が皆燃えた。唇へあてた盃を思はず取り落しても拾ふことを忘れた程醉つて終つた。リジアの神々しい美しさに醉つて終つた。リジアの震へる腕に身を投げかけて戀の女神よ幸あれと讃美したのである。

ネロ陛下は綠玉鏡を取りあげて此の樣子を面白げに見やつた。

「ヴイニチウスの戀人と云ふは彼の女か

「仰せの通りで御座います

「何者ぢや

「リジア人でございます。

ペトロニウスは斯う答へてすぐ話題を外らして終つた。皇帝も侍臣もすぐ他の話に釣り込まれて止め度もない高笑ひが一時に起る。途端に新らしい舞妓は盃を更へて入り込んでくる。天井から薔薇の花が雨のやうに降る。ペトロニウスが陛下の詩を讃美して一曲を所望すると之に和する聲が又一しきり湧く。ネロは歌の所望を輕く受けてすぐポプピアの出席を促した。

今朝程から不快の心持であつたポプピアは皇帝のお召によつてやがて食堂に現れた。紫色の薄衣をゆつたりと着けて花の如き艶麗な顏を惜しげもなく衆人に向けて立つた。二人の夫に離別され皇帝を教唆してその母と妻とを亡き者にした恐ろしい女、キリストの呪ふた罪の中で尤も忌はしい罪、それを一身に集めたポプピアが斯程まで美しい女であろうとはリジアの夢にも想はなかつた所である。リジアは罪ある者よ爾は醜き者であると口の中でくり返しながらも猶

飽かず眺めた。ヴィニチウスはその美しさに恍惚として居るリジアの美しさを一層飽かず見入つた。

折しも滿場水を打つた靜けさ。戀の女神ヴィナスを稱へる皇帝の歌が高く又低く酒の香に溶かされて大理石の大床にまで浸み透る樣に響いた。皇帝の歌が終ると樂人、役者、舞妓、が笛の音、琴の音、につれて皇帝の歌を讃美するので混亂は更に混亂を加へた。シリヤの嬉りがましい舞の手が演ぜられてから賓客の男女はもう狂亂の絶頂に達した。律を失つた樂器のひゞきと語を失した人聲の呟きとの間に醉に狂へる肉の擦音が廣い殿堂にローマの滅亡を告げて居るのであつた。

ヴィニチウスはリジアの身體を確かり抑へて

「わたしはあの泉水の畔であなたを見た時から私の心はあなたの物であつた。あなたの爲めに神は戀を讃美して居る。戀を捨てゝ何を求めやう。さ。接吻を許して下さい。皇帝があなたを呼んだのも明日私に下さる爲めである。明

日も今日も僅か一日の差である。さ。唇を許して下さい。

リジアの胸には突如としてポンパニアの嚴めしい聲が起つた。

「リジアよ。天國は近づいて居る。試みの時が今來たのだ。

一切の煩腦を去つた聖者の叫びと肉に飢えて居るローマ武士の抱擁とが奮ひ起つてリジアの胸に渦まいたのである。汚ある者よ、醜き軀よ、其處に幾多の罪を重ね其處に幾多の憎しみを積んだのであらう。實に燦たるソロモンの榮華も一枝の野の花に及ばなかつた。斯う思ふとリジアは深淵に臨んで果しない谷底を見下した樣に慄然として恐れた。キリストが惡魔を斥けたと同じ勇氣と誇りとを以て幾度かヴィニチウスの抱擁を拒んだのである。けれども弱きものは女である。野獸の如く喘ぎたてたヴィニチウスの燃え立つ唇はリジアの青ざめた唇に迫つて來た。と思ふ途端にリジアの身體は巨人の手に救はれて餘彈を受けたヴィニチウスの身體は醉ひ倒れた舞妓の間に噬と横つた。

ウルサスは動ぜぬ決心を眉間に見せて姫の身體を彼方へと運んでゆく。夜は

もう曉に近くなつて燈の影は淡くゆれた。元老も將軍も哲學者も舞妓も見はてぬ夢から夢へと快樂を追ふた。

薔薇の花は雨の樣に降る。丁度醉ふて眠るローマの行末を呪ふ樣に只音もなく頻に降り注いだ。

(三)

アクテアの室に運ばれたリジアはすつかり勞れて居た。夜はほのぼのと明け放れて松や樅の植込から紅の光が血の樣に流れた。圓柱の半面を眞赤に染めて廊下の所々に光の水溜を畫いた。リジアは神に導れて聖光に浴した樣な深い喜びを覺えて默禱したのである。

「ウルサスよ。父上のお邸へ歸りましよう。

「宜しうございます。

斯う答へたウルサスは賓客の退出に紛れて門外へ逸出しようと思つた。けれ

共アクテアは其の淺墓な考を深く戒めたのである。皇帝の許可なくして門外へ去つたものは一族關係者悉く死刑の厄に過はねばならぬ。そして其身はあらかねの鐵鎖につながれて永久に奴隷の身に甘んじなければならない。鐵の鎖や奴隷の鞭は我慢も出來やう。然しあの謹嚴なプラウチウス、あの慈悲深いポンパニア、それを苦しめることがどうして出來やう。百人の長がネロ皇帝の恐ろしい命令書を帶びて荒々しく怒號する姿がありありと眼に浮ぶ。

リジアは絶望の眼を空さまに向けてウルサスの腕に倚りかかつた。自分はどうしても此處に留らねばならない。そして朝夕の饗の酒の香を追ふて日を送らねばならない。姪りがましい日を重ねなければならない。

「アクテア樣。皇帝陛下に私をヴイニチウス樣に下さる爲めに御呼び寄せなすつたのでございます。

「ヴイニチウス樣の御言葉なれば嘘ではありますまい。結構ではございませんか。

アクテアにはリジアの考へて居る事がよく解らなかつた。アクテアは貞淑な女ではあつたが奴隷の心根が全く失せては居なかつたので若々しいヴイニチウスの半面のみをあまり多く知りすぎて居た。情火に燃え狂ふ恐ろしい接吻がどれ程恥づべき罪であるかを未だ考へる暇が無かつたあらゆる罪と汚れとを征服して得らるゝ平和と云ふ事よりも初めから身を投げかけて得らるる無抵抗の屈服をより賢い平和であると思ふて居た。

「御殿の騒々しさよりも、ヴイニチウス様の許で平和にお暮しなされたら如何でございますか。

「私は參りたく無いのです。

「被の方は屹度可愛がつて下さりましよう。

「どうぞそれだけは許して下さい。

アクテアは不思議さうにリヂアの瞳を見つめた。當時ローマに赫々の武勲あるヴィニチウス。男の中の男と唱はれたヴイニチウス。何處に一つ難をうつ點

があらう。斯う思ふたアクテアはリヂアの初々しい處女の恥しさと云ふことを考へて自分の胸に優しく抱き寄せた。何とはなしに感傷的な涙が頰りにリジアの頰を流れた。

「彼の方をお好きでは無いのですか。

「いいえ。

「では可愛いく思し召して。

「どうぞお許し下さい。妾はキリスト信者でございますから。

「あなたの御心はよく解りました。けれ共。リジア様。陛下は悲劇がお好きで居らつしやる。詩の題材としても、歌の調子としても。

「アクテア様。わたしはもう決心して居るのでございます。わたしはもう自分の心ばかりを頼みとして行きます。

リジアは曙の窓に向つて心ゆくばかり朝風を吸ふた。黎明の榮ある光は滑らかなリジアの髪を五彩に染める。輕い曲線を畫いた兩腕を空に向けて擴げた。

涙にぬれた瞼には白金の露が珊々として散つた。斯うして慰安を求むる喜びの笑ひが一切の現實を淨化して終つた。利欲に悶える凡ての煩腦と榮達に奔る凡ての醜骸は忽然として影をひそめ紫雲ゆるやかに窓に映れば荆冠に榮ある生涯を托した聖者の姿はさながらに來迎する。

デクテアはまだほんとうの祈禱と云ふものを見たことが無かつた。で瞬もせずリジアの横顔を見つめて居た。今にも翼ある天使が神馬に鞭打つて其處の窓から馳け込んで來るかと思ふた。キリスト教徒の說く樣な奇蹟が今にも起つて來ると信じた。今迄疑つて居た自分の信仰を耻しく思つたのである。

やがてリジアは祈禱の手を止めた。傍に膝づいて默禱して居たウルサスの肩に手を掛けて

「わたしは恩人に御迷惑をかけたく無いのでもう家へは還りますまい。神樣がきつと惠を垂れて下さるのだから。ね、ウルサスや。これからはお前一人が私の賴りになつてくれるばかりだ。

ウルサスは何も言はずにリジアの裳に伏した。リヂアはこれからすぐに監督リヌスの許へ逃れて暫く行方を隱さうと考へたのであつた。リヌスは信仰の厚い憫れみに富んだ人である。その人を賴りにウルサスの腕に倚りて皇帝の權力から遠く自由の天地に去ろうと考へた。ウルサスは自分の力强い拳を誇りとして鐵の兜も碎けよとばかり意氣凛然として立ち上つた。得意の微笑が自然と浮ぶ。

「森の中へ。あの森へ。森へ。

と彼の胸中には自由の天地がすぐに浮んだのであつた。リジアは柔和な瞳にあふるるばかりの慈悲を湛えて

「ウルサスや。決して人を傷めてはいけないよ。神樣は凡ての人を愛するのだから。

斯う云つた。朗かな曙光は生々として冲天に輝いた。今こそ眞の試みの時が來た。自分で自分の運命を開拓してゆく時が來た。リジアはアクテアの厚い

情を幾度も感謝して猶永遠に自分の味方信仰の味方、になつて呉れと嘆願したのである。

リジアは住み馴れた土地を離れるのが流石に悲しかつた。然し間もなく眞理の爲めに戰ふ雄々しい快樂が信仰の力によつて著しく鼓舞された。願はくは自分に凡ての艱難を與へてたもれ。凡ての辛苦を授けてたもれ。どんな苦痛でもどんな經驗でも自分は眞面に向つて迫つて行かう。神樣はいつも眞理の味方であると考へた。ブラウチウスの家に居たときリジアは屢々自分の信仰を疑つたことがある。ほんとうに自分がキリストの爲めに献身的の態度をとれるかどうかを危んだ。今こそ其の想ひを眞向に解決する時が來たと思ふと身體中の血が歡喜の波を擧げて濟つた。然しこの歡喜の情はアクテアには解らなかつた。なつかしい故郷を捨て美しい宮殿を捨て、愛する人を捨てて何處へ漂浪するのであろう。アクテアは奇蹟と云ふ言葉をもう一度考へ直して見た。

日が餘程高くなつてからリジアは安々と眠つた。何の恐れる所もなく何の屈

托もなく眞白な腕を枕にして安々と眠つた。カーテンの隙を洩れる光は輕く飛ぶ塵埃を金色に染めて一條の波をリヂアの微動する胸に投げた。

「わたしとリジアとはやつぱり別の且界に住んで居る。

斯うアクテアは考へて其の神々しい寢具から天國の消息でも聞くやうに泌々と見入つたのである。其の美しさを羨やむ心よりも其の初々しさを氣遣ふ心が胸一杯になつてリジアの髪に熱い接吻を幾度もくり返した。春の夜の長き噺に母親が愛兒を搔き抱くやうに飽かずリジアの身體を見護つて居た。

リジアが目ざめたのはもう正午も餘程過ぎてからである。ウルサスは私かにリジアの旨を含んで一足先きへ室を去つて居た。でリヂアはポンバニアの側に寢て居た夢から又宮殿の一室に覺めた時、云ひ知らぬ涙が又新らしく涌いて來る。アクテアと食卓を共にしてから裏庭へ散歩に出掛けた。未來に希望を抱いて居るリジアの面は昨夜に變つて晴やかな光を投げた。アクテアは此の小鳩の樣なか弱い女を遠い國へ放してやる氣にはどうしてもなれなかつた。

「ヴイニチウス様はローマでも俠氣のある尊い仁とか聞いて居ります。あなたはそう思し召しませんか。

「えい。大へん親切なそして美しい方と思ひます。けれ共、昨夜の事を思ふとわたしは胸苦しい様で堪えられません。

「それもあなたが御結婚なすつたならば

「いゝえ。わたしは此處を出で行きたいのです。去らねばならないのです。

「どう御考へなすつても。

「アクテア様。どうぞお許し下さい。

植込の木下暗から急に明るみに出たので草いきれの強い光が眼に泌みる程痛い。庭を一廻りして香はしい花にうつとり見惚れて居る間に靜かな足音が開えて來た。黄金の環に白い鳥の羽を結びつけた日除けを翳してポプピアが悠々と現れたのである。漆を着けたかと思はれる程黑光りのする埃及婦人が小兒を抱いて其の後につゞいた。アクテアは丁寧に首を垂れた。ポプピアはすぐ後の葉

かげに控えて居たリジアの美しい姿を暫く見遣つて居た。

「この奴隷は何した者ですか。

「ポンパニア様の養女、リジアの姫でございます、奴隷ではありません。

「何の爲めに此處へ。

「ローマへ人質に參つたのでございます。

「誰の命令で。

「陛下の御差圖でございます。

「えつ。陛下の。

ポプピアの眉間に颯と一抹の曇を生じた。ポプピアは自分の若々しさが次第に衰へて行くことを常々憂へて居た。嫉妬の焔は惡鬼となつてリジアの頭上に掩ひ被さつた。荒々しい言葉を殘してすぐ踵を返して終つた。其後姿を泌と見遣つたリジアは云ひ様の無い腹立たしさと取り止めのない憐れみの情が新らしく涌いて來る。花から花へ辿りゆく羽虫の呟きがけたたましい赤兒の泣き聲

に塞ぎられて庭園の長閑かな空氣が一しきり震動したのであつた。

誰そ彼れ時が再び廻つて來た。廣い殿堂の彼方此方に奴隷の捧げてゆく燈火の光が急に忙しく見える。アクテアとリジアは青白く炎(も)える燈火を眞中にして暫くは思ひ思ひの冥想に耽つて居た。

「凡ての事は只神樣が知つて居らつしやるのだ。

斯うリジアは考へてアクテアの胸に顏を埋めた。これが永い離別になるのかもしれない。とアクテアも突きつめた感じに只涙が先に立つた。で寶玉や首飾をリジアの衣裳(コロモ)に結んでせめてもの餞別(はなむけ)とした。

荒々しい足音がして急に逞しい武士が入つて來た。それはヴィニチウスの侍臣であることは一眼見て解つた。リジアは恐ろしい中にも半ば待ち設けて居た。樣に立ち上つた。

「すぐ參ります。

アクテアの腕へ身體を投げかけて暫く別離(わかれ)の涙を呑んだ。

（四）

「もう其處まで來て居るかもしれない。

斯うヴィニチウスは幾度か獨り言を洩しては窓の外を眺めた。窓の外には靜かな夜が次第に更けて星の數が一つ一つ增して行つた。リジアを乘せた轎(かご)は今しもローマのカリネ街をゆるやかに練(ね)つてくるのである。やがて黑裝束の人々が遠卷きに迫つて居た。轎を守る侍臣を始め奴隷の者共はそれが例の眞球狩ではないか疑つた。眞球狩とはネロ皇帝が興につれては諸方に美しい女を掠奪させた當時の恐ろしい習慣であつた。

「ローマ貴族、マークス、ヴィニチウス樣のお轎だ。下に居れい。

と奴隷は殊更に聲を張り上げたが街上の怪しげな人影は途を避けやうともしなかつた。轎かきの奴隷は怒りのあまり其の一人を打ち倒したのが渾亂の初まりで不意の衝突は意外に激しくなつた。其の渾亂の間にウルサスはリジアを橫

さまに抱き込んで遠く闇に沒した。それを合圖に怪しげな人影もいつか見えなくなつてウルサスの拳に此世を終つた痛ましい侍臣の軀が冷やかな大地に横つた。

之の變報を聞いたヴイニチウスは青銅の燈火臺を大理石の大床に叩きつけて怒つた。その夜はすぐに邸中の召仕を驅り集めてローマの大路小路を隈なく探らせたが何の得る所もなかつたのである。全ローマを破壞しても全世界を滅ぼしても此の憾みには代えられないとまで悲しんだ。だんだん頭が冷靜になつてくるとすぐ恐しい想像が萠した。

「眞球狩。眞球狩。

と思ふとネロ皇帝が美々しく裝ふたリジアの腕にもたれて玉座の上に得意の笑を洩して居る姿が明々と浮ぶ。ポプピアのそれにも增して艷やかなリジアの額色。ポプピアのそれにも增して神々しいリジアの立姿。

「おゝネロよ。爾がケーザルならば俺は屹度カシウスになつて見るぞ。

斯う考へるともう矢も楯もたまらなくなつた。憤懣の情と猜疑の魂とを一つ轎にのせて宮殿へと急がせた。門衛が少しでも自分を拒めば萬事は破裂すると考へ乍ら大理石の玄關に下りてすぐ拜謁を請ふた。百人の長は憂愁の面持で拜謁の御許なき旨を傳へた。ヴイニチウスは思はず階段を一歩進んで

「何故に

「御世繼の王子が昨日から御不快で陛下には御枕許に夜の日も合はさずに居られる。

「ではアクテア樣に御取次を願ひたい。

アクテアの居間に導かれて長い間待つて居た。病室から戻つて來るアクテアの姿を見るとすぐに

「リジアを。リジアを。

「それは私からお尋ねしたいと思つて居りました。リジアはあなたの御手許にお居でではありませんか。

「それが途中で失はれたのです。アクテア様。陛下の御手に入つたのではありますまいか。

「陛下は昨日から王子の御病床に附きつ切りで

「ではプラウチウスか。そうだ、ポンパニアか。

「いゝえ。御兩方とも今朝程お見えになりました。やはりリジアの噂で御心配の餘り。

ヴイニチウスは再び霧中の裡に沒した。此の上はネロ皇帝の權威と自分の勢力とを全ローマ帝國に傾注して大地の底、草葉の陰、までも探さずには置かないと決心した。とぶ鳥の翼あらば翔けもせよ、地走る獸の足あらば驅けもせよ。ローマの武士が戀の焰はあだに燃えては居ない。炎々たる情火は四海の萬波を覆してもどうして其儘消えやうかと固く固く思ひ定めた。

「ヴイニチウス樣。リジアが再び出て來た曉はもうあなたの物ではありますまい。リジアは死刑に處せられなければならない。

「それは又何故に。

「昨日ポプペア樣が王子樣を連れて裏庭を御散歩の時、丁度私とリジアも散歩して居て計らずもお目にかゝりました。其の夕方から王子樣は御不快になつたのでございます。

「それがリジアに何の關係がありましよう

「異國の怪しき女性が怪しき魔術を使つて王子の御生命を窺つたと云ふポプペア樣のお考に御氣が附きませぬか」。斯う云つてヴイニチウスの顏を泌と見つめた。「あなたばかりでは無い。此の世界が再びリジアを得ることが出來なくなるのです。美しいリジア。可憐なるリジア、は永久に呪はれて居るのです。

ヴイニチウス樣。其處にお氣が付きませぬか。

ヴイニチウスは深い憂愁の眉をひそめて歸宅の途に就いた。途中ペトロニウスに遇ふとペトロニウスはさも打開けた優しい笑を洩して青年の一徹な心を色色に慰めた。リジアが魔法遣ひであると云ふ噂もあるがそれはポプペアが猶太

人の信仰を持つて居るからだ。惡靈と云ふことを信じて居るからだ。と斯ふ說いて聞かせた。

「それに陛下も人一倍迷信家で居らつしやるからな。だが丁度幸だ。リジアこそその惡靈に捕はれて一夜の中に姿を隱したのだと斯う云ひ振らしたら好らからう。

「ほんとに捕はれたのかもしれない。

「それは何とも云へない。だからお前があの晩空中を飛んで行くリジアの姿を見たとでも云へば他人は猶恐ろしい惡魔の姿をそれに付け加へて合槌をうつに違いない。

「惡魔の業と

「そうだ。神と云つても好いだらう。

「神と。

「何と云ふ神かわからない。ローマの女は大低違つた神を持つて居るのだから

な。だがポンパニアは屹度自分の信ずる神をリジアに授けたに違い無い。人はポンパニアをキリスト信者と呼ぶが確かな事は解らない。キリスト信者は驢馬の頭を禮拜したり人間の血を呑む樣な迷信家だからポンパニアの樣な貞淑な女には適はしくない」。斯うペトロニウスは考へたがすぐ又思ひ出した樣に附け加へて「だが何でも只一柱の慈悲深い神だそうだ。自分を罵る者、呪ふ者の爲めにも祝福すると云ふ事だ」。

「迷信でも好い。明日百頭の牛を其の神に供へやう。

ペトロニウスは甥のいらいらした心持が可愛相でたまらなかつた。どうかして其の苦しみから救つてやりたいと云ふ肉身の親しみと同情とが頻りに胸を突いて涌いた。で自分の家に仕へて居る奴隷女の中で美しい氣に入つた者を甥の自由にさしてやらうと考へた。ローマの貴族は多くの美しい奴隷を抱えて置くのが當時の誇であつた。でペトロニウスも幾人かの美人を特に撰んで居たのである。其中でもイリスとユニセは一際目立つて美しかつた。ペトロニウスはユ

ニセの腰に手を掛けたまゝ甥の顏をのぞく樣にして

「ヴイニチウスよ。すこしは晴々としなくてはいけない。さ。連れて行け。ユニセはお前の冷え切つた手足を溫めてくれるであらう。

「わたしはタイバーの河向ふへ往つて見やう」ヴイニチウスは叔父の言葉を耳にも入れず斯う獨言を殘したまゝ急いで室を出た。

ユニセはペトロニウスの言葉を聞いて顏を蒼くした。と云ふのはユニセは早くから主人ペトロニウスの逞しい風采に及ばぬ戀を起して居たからである。夕方になるといつも客間に据えてあるペトロニウスの大理石像の下に立つた。像の横顏を泌々と見つめては感傷的な感情にそゝられて其の和かい腕を冷たい石像の頸へ搦む。金色の房々した髮に情熱の波をうたせて沈默の固い唇へ溫い接吻を幾度も幾度もくり返して果敢ない心遣りとして居たのである。ユニセはヴイニチウス家に奴隷の司長として仰がれるよりも此の家に水汲み女として暮したいと思つた。其頃の捉として主人の命に叛く奴隷は痛ましい鞭の刑罰を受け

ねばならぬ。ユニセはその刑罰を甘んじて受けた。

ペトロニウスもユニセの心根のやさしさに絆されて其事はすぐ思ひ止つた。だんだん話を聞いて見るとユニセは一人の賣者を知つて居てそれが何んな逃亡人でもすぐ探し出すことが出來ると云ふ

「お前は占つて貰つたことがあるのか

「はい

「何と云ふ占が出た。

「苦しみにすぐ無上の幸福がつゞく。と云ふのでございます。

「その通り當つて居るか。

「はい。先の苦しみは鞭で後の幸福は

「幸福は何か

「あなた樣の御側に居られる樣になりましたので」。赧らむ面を伏せてペトロニウスの裳に接吻した。ペトロニウスは其肩に手をかけて

「ユニセや。何と云ふ賣卜者か

「チロ、チロニデスと申します。

齒並びも髭もまばらな汚らしい男がペトロニウスの召しに應じてずぐ入つて來た。半白の髮に肩は脊虫の様に腫れ上つて居る。黄ばんだ顏色に猿の様な鋭い眼を輝して居る。ペトロニウスとヴィニチウスはリジアを探し出すことに就て色々の事を尋ねた。

「どう云ふ手段でする積りか

「賢明なる殿様。わたしは智慧を持つて居ますが手段は殿様がお持ち合せでございます

ヴィニチウスはもどかしさに

「勿論だ。金はいくらでも出す。詐では承知しないぞ。

「わたしは賣卜者でございます。殿様。哲學者でございます。

「では何學派の哲學者か。

チロニデスは鋭い眼を一方に釣り上げてキニック派だのヘラクリタス派だの色々の學者の名を數へた。ヘラクリタスは萬物が液體から成ると云つた。酒は液體である。酒から世界が生れ智慧が出てくる。ジオゲネスは萬物が空氣から成ると云つた。暖かい空氣が生物を增やし冷たい空氣が生物を枯らす。暖かい空氣は酒であたためるが一番。斯んな事を取り止めもなく喋り立てゝ兩方の手で金勘定の眞似をしては淋しい笑を洩した。話がまじないの事から神の事になつたときチロニデスは

「リジアの信じて居た神に就てお心當りはありませんか。

「一向に知らぬ。

「符呪とか記號とか云ふ樣な事は。

「一度沙の上へ魚を書いた事があつた。

「何ですか。あの魚を。

「チロニデスよ。それが何うかしたのか。

「魚。魚。

（五）

其後暫くチロニデスの姿を見なかつた。ヴイニチウスの不安はいつまでもいつまでも續いてともすれば何事も手につかなかつたのである。

宮殿では王子の病が益々危篤に陷つて悲しい報知が其處此處に傳つた。明るいローマの殿堂も濕り勝ちの影を宿して葉うらを反へす力ない風が日ごろのどよめきを呪ふ樣に重いカーテンの端を微かに動かして居る。ネロ皇帝のなげきは他人よりも著しく物思ひに沈む日が多いのでペトロニウスは轉地して夏を外らす樣奏請した。で皇帝も其の勸告を納れやがて行幸の地をアンチウムへと布告せらたれのである。其日ペトロニウスは轎をヴイニチウスの邸に枉げて

「哲學者から何か報知でもあつたか

「もうあんな欺信師を賴みにはしない。

「そう右から左へともゆくまい。まあ靜かに觀て居るがいゝ。ヴイニチウスよ。物淋しい日にはアンチウムにやつて來い。あすこには酒と女で一杯になつて居る。

此處へ噂をした哲學者が入つて來た。で何か大發見でもした樣につまらない事を大袈裟に話した。ともすればわざとらしい哲學者の名前や學問上の單語などを交へては身振、手振、まで添へた。キリスト、神の子、救主、と云ふ三つの言葉をギリシヤ語で讀んで其の頭文字を組み合せれば魚と云ふ文字になる事などを事々しく話した。魚はキリスト信者の記號である。多くの奇蹟がその言葉の中に含まれて居る。斯ふ語つてキロニデスは物凄い笑を洩した。

「殿樣。わたくしも昨日からキリスト信者になりました。彼等仲間の秘密を聞きたいばつかりに。

「僞りに信者となれるものか。それを誰が信じやう。

「其處が哲學者でございます。殿樣。あなたに惠を垂れ給へ。

「何と云ふ身振だ。

「これが基督信者同志の挨拶でございます。殿様。御免下されまし。

哲學者は莫大の金を貰つて再び去つた。ペトロニウスも間もなく歸つた。

ヴイニチウスは茫乎として庭を眺めた。今しがた降りすぎた雨はもう名殘なく霽れて木の葉から草の葉に傳はる雫が黄金と散り白金と光る。人間の掌を思ふまゝに打ち開げた樣な木の葉面は滑かにきらめく。今しも榮ある自然は平和と慈愛とに充ち充ちて安らかに微笑して居る。此の靜かな天地にどうして斯う鼓動が劇しいのだろう。何故斯ふ取り止めもない幻影に惱むのであろう。理性の冷やかな判斷はともすれば淡雪のやうに消えて昂奮した熱情が潮の樣に去來する。斯う考へると多感なヴイニチウスはいつも空の中を大股で歩く。一歩一歩に力を入れて行つたり來たりすると少しは心も靜まる樣に感じた。

斯う云ふ日がそれから毎日續いて居た。

チロニデスが又やつて來たのは餘程經つてからであつた。今度はリジアが確

かに基督信者の中に隱れて居ることを告げたが。それよりも此の哲學者に取つて大事件なのはぐずぐずして居ると恐ろしい自分の舊惡が露はれて來る樣な場合になつたからである。或る日チロニデスが祈禱會へ出掛けると自分が嘗て慘慘に惱ました男を同じ信者の中に發見した。其の男に見付かつては自分の舊惡がすつかり曝露して終はねばならない。チロニデスはヴイニチウスを說きつけて先づ此の男から除かねばならないと考へたのである。アリストートルは大事の前に小事を犧牲にして終へセネカは死は現實から出でゆく解脫である。と斯ふ言つた。チロニデスは古い賢人の言を巧みに利用して自分が相手の男を殺して了ふと云ふ主張に理屈らしい理屈を付けた。でヴイニチウスも其の請を納れて猶リジアの動靜を探らしたのである。

チロニデスは夕ぐれの淋しい日に或る小さな街の知人を訪ねた。少しばかりの果物や駄菓子を店先に並べて居た老人はチロニデスの來訪を心よく迎へた。

チロニデスは基督の名を唱へて神妙らしく信者の挨拶をしてから突然の來意

を述べたのである。どうか力の強い無口な男を一人周旋してくれと云ふので老人はすぐ知り合の麵麭屋を紹介した。其處には夕方から粉をひくために二三人の若者を雇つて居るからである。やがて片肌抜いだ逞しい勞働者がチロニデスの前に導かれて來た。チロニデスは齒の缺けた淋しい口先にわざとらしい笑を湛えて

「お前さんの名は。

「洗禮をうけましてからウルバンと呼ばれて居ります。

二人は町はずれの土手に腰を下した。もう夜はすつかり更けて粉屋の水車が重い音たをてゝ靜かに廻つて居る。

「ウルバンや。基督の愛がお前の身に幸ある樣に」、チロニデスは祝福の意を洩してから急に言葉を變へて、「お前はイスカリオテのユダを聞いた事があるか」

「知つて居ります。キリストを賣つた憎むべき者です。

「もし今でもキリストの名を賣る者があつたならば。

「勿論我々の敵です。

「さう。罪を犯し罪に馴れて居るものを許して置くのは我々の權威を損ふものだ。神は凡ての敵を愛して居るが不義を許しては居ない。昔のユダが純朴な小羊を暴逆な敵の手に渡した樣に今のユダも恐ろしい蛇の頭を擡げて居る。おゝ恐ろしい事だ。恐ろしい破滅が我々の身に降つてくるかもしれない。

チロニデスは確り掌を合せて闇の中に首を垂れて。深い沈默がつゞく。若者は底力のある聲に少しサビを持たせて

「何者です。其の叛逆人は。

「皇帝に内應して我々の信仰を賣る憎い男だ。

チロニデスは遂々ウルバンを口車に乘せて自分の仇敵を暗殺させる事にしたのである。丁度其の翌晩にオストラニウムで基督信者の大集會がある。その途で相手の男を亡き者にしようと誓つたのである。

翌る朝早くチロニデスはヴイニチウスを訪ふた。丁度ヴイニチウスが香膏

を肉付きの好い肌に匂はせて居る時であつた。

「殿様。昨夜例のウルサスに遇ひました。

此の言葉はヴイニチウスの胸に一道の光を投げた。ウルサスはリジアの影法師である。その男が此のローマ街から程遠からぬ麺麭屋の水車場に雇はれて居るとすればリジアも必ず此の街近くに居なければならない。丁度今夜オストラニウムと云ふ古い淋しい墓地で基督信者(クリスチヤン)の會合があると云ふからには必ず其の中にリジアの姿を見るであらう。基督教の大僧正、タルソのポーロが其の會合に出席することが一層その望みを確かにした。ポーロと云へば世にもすぐれた聖者である。その聖者の姿を拜まうと四方の群集は皆オストラニウムに集まるであらうとチロニデスもつけ加へた。楚々たるリジアの美しい姿がすぐ眼の前に浮んで來て今迄長い間の苦しみと惱みとが一時に溶(と)けて行く様に思はれた。顏から手足まで新らしい精力に緊張して限り無い感激で滿(みち)ち滿(みち)た。

ヴイニチウスは今朝ペトロニウスから來た手紙を思ひ出した。其の中にはクロトと云ふ力士のことが書いてあつた。

「そうだ。その力士を呼(よ)ばう。それさへ居てくれゝばウルサスと拮抗するに充分である。

「殿様。早まつては事を仕損じます。一度仕損じてはもう再び手に入る機會はありますまい。殿様。まあ靜かに容子を御覽なさらなければいけません。

ヴイニチウスもチロニデスの注意を是認した。でチロニデスを案内として今夜オストラニウムに行かうと決心したのである。

ヴイニチウスは書齋に入つて長い間手紙を書いて居た。ペトロニウスへ向けての歡喜(よろこび)の消息(たより)であつた。

(六)

「覺(さ)めよ。覺めよ。死より覺めよ。

「めぐみ深き神を讃(たゝ)へよ。基督(クリスト)を讃へよ。

低い聲ではあるが力の籠つた聲が方々に聞えて來た。月のあがるのには未だ間があるので闇い砂地には多くの人の足音ばかりが入り亂れて響いた。燈火をさげてゆく者も外套の陰にその光をかくして行くので只物のかげがさながらに動いて行くやうに見える。オストラニウムの淋しい夜は一時ごとに混雜して來て群集の一團は其處にも此處にも森かげのやうに黑くうごめいた。

群集の中にはヴイニチウスとチロニヂスも姿を變へて交つて居た。丁度常春藤が一杯に生えて居る禮拜堂の所へ着いたとき月が銀色の光を靜かに投げた。と思ふと炬火が一時に明るく燃えたのを合圖に群集は徐ろに歌ひ始めた。低い聲がだんたんに熱情を帶びて震へ乍らも高まつてゆく。

何と云ふ崇高な光景であらう。誠心と熱情とが溢れ出てくる讃美歌は其處此處等の草も木も一つに包んで幽玄な而も哀れつぽい音調が一面に擴がつてゆく。丁度深い山の中から湧り出る泉の冷たい清い流れが落葉がくれに囁やき乍らやがては谷間の滸湍に合してゆく樣にはてしない靜けさから限りない昂奮に多

つてゆく。やがて闇に彷徨ふ漂浪人の救主を叫ぶ沈んだ聲が止むと群集は一樣に廣い蒼天を仰いで兩手を擴げた。

茫々たる蒼天。其處には輕く雲を帶びた半月と無數の星が嬉しさに堪えられない樣な微笑を以て輝いて居る。群集はそれを暫く凝視めて居た。月の淡い光が仰向いて居る人々のうるんだ瞳に映つて白金の樣なきらめきを湛えた。ヴイニチウスの心はもう何となく森嚴の氣に打たれて寒い樣な痛さを覺えた。今にもあの天空から白衣の聖者が舞つて來る樣に感じて思はず膝まづいた。そして群集のするやうに思ふ存分兩腕を擴げた。廣々とした蒼天を仰いで感激の眼を向けたのである。

嘗て將軍として小亞細亞に行つたとき埃及に渡つたときヴイニチウスは幾度か巍然たる禮拜堂を見た。抑揚の巧みな讃美歌を聞いた。燦然たる儀式を見た。けれども何の儀式もなく何の拘泥もなくて眞心から神の心に接する禮拜を見たのはこれが初めてであつた。嬰兒が母親にすがる樣な、小羊が羊飼人を慕ふ樣

な、美しい憧憬の念を今初めて知つたのである。神の大きな惠、それは世界の凡てを包む樣な大きな惠、何と云ふ美しい惠みであらう。斯う考へたヴイニチウスの胸には感謝の念が一杯になつておのづから涙が浮んだ。

聖者はやがて岩の上に立ち上つた。群集は又一しきり騷めいた。チロニデスはヴイニチウスの耳に口をあて、

「あれがキリストの最初の弟子です。ペテロ。

もう餘程の年齡であつた。靜かに十字架を描いて群集を祝福した。群集が一樣に感謝の眼を注いだ其の人ペテロを見上げたときヴイニチウスは再び驚いた。金冠の輝きも琥珀の杖もなくて無雜作に投げかけた弊衣の、そされへ永い間の旅で雨や風に色褪せて居る。遠い沙漠の地を旅から旅へ漂浪してゆく只一個の漁人に過ぎなかつた。眼の窪んだ頰骨の高い老人に過ぎなかつた。

靑年の若々しい誇を尊ぶローマの武士ヴイニチウスは斯んな卑しい渺たる老人の口から何物をも期待しやうとは思はなかつた。老人は神を見る誠の心は決

して他人に求むるな。自分の心を淸淨にせよと說いた。其日の淺ましい快樂に限りない神の心を汚してはならない。誠の快樂は凡ての煩惱を征服して美しい眞理を愛する情に宿る。それが善でありそれが美である。と說いた。

ヴイニチウスは疑惑の眼を以て之を聞いた。誠の快樂は自分の肉體が自由に發育して行く所にある。その自由の發育から欲望する快樂の外に何の快樂があらう。リジアを慕ふ自分の心は只リジアの美しさを欲したからである。それが善であり美である。自然の欲望を捨てよとはリジアを棄てよと同じことではないか。ヴイニチウスは斯う考へて老人の言葉を憤つた。かゝる矛盾多い言葉を熱心に聞いて居る群集を憐れに思つた。煩惱を去れとはキニック派の學者も既に說いて居る。セネカも既に敎へて居る。何の新しい說であらう。ヴイニチウスはそれよりも此の人達が奇蹟と呼んで居る魔法を見たいと思つた。

ペテロの面は昂奮した熱情で震へた。平和と正義とを求めて淸淨なる生涯を送るのは此の世に於ての光榮ばかりでは無い。地上に於て獲られぬ歡喜と幸福

とを天國に於て得られるからである。永遠に存在する全智全能の神の力は之を天國に求めなければならない。そして其の天國は自分の心に圓滿具足して居ることを忘れてはならない。其の心を以て隣人を愛せよ。其の心を以て衆人を愛せよ。己れの味方ばかりでは無い凡ての人を愛せよ。キリストは自分を賣つた猶太の民をも自分を十字架に掛けたローマの兵卒をも喜んで愛したではないか。神の子として救主は凡ての人の爲めに血を注がれたのであつた。それがやがて神を愛する一番大きな德である。と斯う說いた。

ヴイニチウスは其の言葉を聞いて再び疑つた。自分の敵をも愛すると云ふ事が出來るであらうか。もし出來るとしても何れだけの價値があらうか。愛は自分の心と肉體から湧いて出る唯一の欲望である。リジアに對する愛の外に自分は誰を愛することが出來やう。斯ふ思ふと老人の言葉は一つ一つ自分の爲す事に裏切りする樣に心憎く感じた。

炬火の餘燼が又一しきり燃えて風なき闇に一筋の焰が眞つすぐに上つてゆく

ペテロは兩の手を胸の上に綾なして暫く瞑目する。炬火の光を片面に受けながら昂奮した身體を震はし乍ら再び語を繼いだ。基督は十字架に掛つて遂々死んで終つた。幾日かの間自分はヨハネと共に淋しい暗夜に泣いて居た。三日目の曉にマグダラのマリアが狂はし氣に驅け込んで來て基督の墓所に異變のあることを告げた。自分はマリアと共に其處に行つたとき基督は驚く弟子に向つて爾等に幸あれ、と誡して光明の裡に蘇生られたのである。と斯う說いた。主は蘇生り給へり。と云ふ讃美の呟きが群集の裡に起つた。

ヴイニチウスは其の奇しき物語に泌々と耳を傾けた。ローマの殿堂に滿ち滿ちて居る珍寶美玉も、ローマの饗宴に侍る數千の舞妓も、今はすつかりヴイニチウスの胸から去つて只復活の奇しき光が一杯に擴がつて居る。恍惚として老人の言葉を聞いて居ると聖地の山河がすぐ眼の前に展開されて昇天してゆく基督の姿は世界のあらゆる物を慈悲と平和で包んでゆく。救主を乘せてゆく金色の雲は自分の足許からも湧いて來て自ら淸淨なる天地に漂つてゆくのかと思つ

た。ローマも無げれば皇帝も無い。敵もなければ味方も無い。只一様に基督の愛に充たされて赫灼と輝いて居る。ヴイニチウスは靜かに自分の心の中を考へて見た。自分の今迄求めて居た愛が自分のほんとうの心の叫びとは餘程異つて居た様な氣がして思はずも老人の方へ兩手を擴げた。何か訴へたい様な物淋しい様な氣がして堪えられなかつた。

チロニデスが急いで外套の袖を引いたのでヴイニチウスは夢心地から醒めた様に其の指さす方に眼を据へた。

「殿様。あれ。あの老人の側にウルバンが居ります。

高い崖の上から深い谷底へ突き落された様に愕然としてヴイニチウスは腕を組んだ。

リジアは老人とウルバンとの間に挾まれて靜かに祈禱を上げて居る。と思ふとヴイニチウスの身體中の血管が急に叛旗を飜へして一揆でも起した様に劇しく活動し初めた。聖徒ペテロも群集も教訓も忽然として消え失せ只リジアの美

しい姿ばかりが明瞭と浮き出て來る。おゝリジアよ。幾日の間お前の姿を焦れて居たろう。無雜作に垂れた其の髪の毛、微かに啓いて居る其の唇、それが今數歩の間に居るではないか。うつとりとしてペテロを見上げて居る其の横顔のゆるやかな曲線、肩から腰へ明るく照した炬火の輝き、その神々しさと美しさは世界の何物と代へても惜しくないと思つた。

炬火の影がだんだん淡くなつてゆくと思ふたのはやがて黎明近くになつたのであつた。ヴイニチウスは力士クロトと會合の出口の物かげに待つて居た。ウルサスとリジアの後を追ふてその隱れ家を突きとめたいと思つたからである。やがてリジアは三四人の人達に護られて出て來た。チロニデスは小聲で

「殿様。あの一番先きへ行くのが徳の高い使徒でござります。

群集は一様に禮拜すると使徒は兩手を擴げて祝福する。その態度の謙遜な敬虔な有様はすつかりヴイニチウスの心を魅した。世の凡ての女は富と權力と煩惱で容易く征服出來るものと思つて居た。少なくともローマの貴族にはそれが

凡て可能であつた。けれ共リジヤの愛情は全ローマが追求して居る所と異つて居ることに氣がついた。リジアの心には皇帝や自分には未だ知られて居ない樣な歡喜と幸福とが一杯になつて居る。自分はリジアを掠奪して宮殿に囚へて置くことは出來やう、然しリジアの心の前では皇帝も自分、何の權威も無いであらう。斯うヴイニチウスは考へると自分等の世界と此の人達の世界との間に恐ろして大きな隔が出來た樣に悲しかた。リジアと自分との間に斯う云ふ恐ろしい隔を起した此の人達の信仰は何と云ふ無慈悲な敎であらう。春さき薄綠の芽をふく樣なやさしい少女の心を冷たい魔の手で仰へて終ふのが何うして善である。どうして美である。ヴイニチウスは又もや猜疑の炎をもやして群集を憎んだ。今迄泌と考へ込んで居たペテロの說法を一々嘲罵した。彼等の薄暗い隱れ家を日光の活々とした明るみを掘り覆へして思ふ存分笑つてやりたかつた。

リジアの一行がタイバーの河向へ着いたときはもう朝日が白みかゝつて居た。常春藤が一面に匍ひまつはつた土塀を一廻りしてとある路次へ曲つた。ヴイニ

チウスがその後をついて四圍を見廻はすと其處はローマの貸家で汚らしい入口がいくつも並んで居る。長い廻緣を辿つてゆくと側の泉水に沿ふてウルサスが立つて居た。少し許の野菜物を籃に入れて朝食の仕度にとりかゝつて居る所であつた。ヴイニチウスが一寸クロトに目くばせをすると猛虎の樣な力士はウルサスの頭をねらつて飛び掛つたが其の隙にヴイニチウスは奥の室へ入つた。

室の中央に爐を設けて煙がちの焰が舞ひ上つて居る。リジアは一人の老人とその側に居たがヴイニチウスは半ば本能的にリジアを横さまに抱き込んだまゝ老人を押しのけて外へ出ると其處にウルサスは血に塗れたクロトの死骸を兩手にさげゝて悠然立つて居た。ヴイニチウスは廻緣を一廻りする時全身に劇しい震動を覺へて凡ての感じが夢の世界に入つた樣に茫乎として終つた。たゞ震へる樣な女の聲で

「あれ、ウルサスや、殺しては嫌よ。

斯う云ふ聲も遠い遠い彼方の樣に響いてやがて何にも解らなくなつた。

チロニデスはヴイニチウスとクロトとが今出てくるか今出てくるかと思つて土塀の陰に待ち構へて居た。が日が高くなるにつれて市場へ通ふ街の人が刻々に增して來た。怪しげな風采をした自分の姿が特に目立つのでチロニデスは遂遂家路へ就くことに決心した。それでも途々ヴイニチウスの身の上が氣に懸つて幾度か後戻りしては又思ひ直して力ない歩を進めたのであつた。

酒舗で一二盃重ねて漸く自分の家へ入つたのは餘程經つてからであつた。勞れ切つた身體には少しばかりの酒でも心地よく利いてすぐ眠りに陷つた。日光が東の窓から明るく照して汚らしい壁へ止つて居る羽虫の脊を溫めてからやがてそれが西の入口へ廻つた。入口から寢臺の下まで一筋の夕日が赤赤と射込む頃までチロニデスは前後不覺に眠つた。

夕餉の仕度で街々が又一しきり賑ふ頃入口へウルサスの姿が不意に現はれた。チロニデスは驚愕の情と不安の念とで暫くは口も利けなかつた。

「チロ、チロニデス殿

「神よ惠を垂れ給へ」。斯ふ僅かに云つたが猶震へ乍ら「何か御用なのでございますか。

「チロ、チロニデス殿。貴殿の御主人マーク、ヴイニチウス樣から御召しでございます。

（七）

頭の傷は割合に淺かつたが腕の骨を少し挫いたのでヴイニチウスは暫く人事不省の狀態に陷つて居た。枕元にはウルサスとリジアとが一人の醫者を相手に頻りに治療の經過を氣づかつて居る。

「頭の傷は大丈夫でございましようか

「大丈夫ですとも。ほんのかすり傷です。

「それで安心しました。實は大變に心配して早速ウルサスを伺はせたのでございます。

「えつ。ウルサス」。と醫者は驚いた樣に首をあげた。「では昨夜私を暗打ちにしようとしたのは此の方でしたか」。

「その事は私も聞きました。あなたを基督信者の叛逆人として恐ろしい計企を敎唆した人こそ神の心を賣つたものでございます。

ウルサスは沈默の裡に首を垂れた。そしてペテロの說いた凡ての人を愛する神の心を靜かに讃美した。一同は病者の周圍に集つたまゝ祈禱した。

リジアの厚い介抱でヴィニチウスは間もなく元氣を恢復した。靑銅の器に冷やかな水を容れて絕へず頭を濕して居た美しいリジアの姿がすぐ眼に入つた。

「おゝ、リジア樣

リジアは憂愁の眼を靜かに向けて、

「あなた、靜かに遊ばせ。

「リジア樣。あなたは此の亂暴な私を救つて下すつたのですか。殺すに忍びないと思し召したのですか。

「神樣は凡ての人を救ふて下さるのです。

雪の樣に白い額には薔薇色の血が漲つた。久しく手を入れない肌は痛ましくも荒れて居るがキメの細かい自然の美しさはやはり一際眼立つて見えた。然しヴィニチウスの心を感動さしたのは其の姿よりもその心の美しさであつた。皇帝の持つて居る凡ての寶玉で身を飾るよりも世界のあらゆる錦襴を着飾るよりも誠の愛で一杯になつた心の方がどれだけ美しいであらう。ヴィニチウスは泌泌其の敎の美しさに感謝の涙を流した。

ウルサスがクロトを殺したと云ふ事實は如何なる理由があるにしても刑法上の罪を免れることは出來ない。況して基督敎信者の仕業と云ふことが知れたならはどんな騷動を惹起するかもしれない。でヴィニチウスの傷が快方に向ひ次第一同は又新たなる隱れ家を求めるために此處を去ろうと決心したのである。それをヴィニチウスは幾度が止めた。もしあなた方が告發された場合には私が辯護いたします。いつでも證人に立ちます、斯ふまで云つたが一同の猜疑心は

容易に解けなかつた。

今鼓でリジアと別れたらば又何時何處で遇へよう。と斯ふ云ふ掛念がヴイニチウスの胸に擴がると傷の痛みも頭の苦しみも忘れて了つた。

「クロトは今日旅に出ることになつて居た。その事を人は皆知つて居る。ただ希臘人のチロ、チロニデスと云ふ者を口留めして置けば誰もクロトの居ないのを疑ふ樣なことはあるまい。

リジアはローマの宮殿を出てから以來、讃美歌と祈禱の裡に終日を送つて居たがヴイニチウスの事も忘れることが出來なかつたのである。殊に雨の淋しく降る夜、風の荒く吹く晩、は眠り兼ねたる枕邊に幾度かヴイニチウスの勇ましい姿を見た。その人が今ゆくりなくも此處に病を養ふて居ると思ふとリジアの胸も流石に炎え立つた。で神の謙遜な心と慈悲の情とがヴイニチウスの心に宿る樣に私かに祈つて居た。リジアは少し赧らむ面を伏せてヴイニチウズの傷が全快するまで神樣と一緒に看護したいと告げた。

ウルサスがヴイニチウスの手紙を持つてチロニデスを呼びに出掛けてから暫く時が經つた。チロニデスはおどおどし乍ら室の中へ入つて來た。ウルサスを欺して基督教徒を賣つたと云ふ弱點があるので頭巾を深く被つたまゝヴイニチウスの側に蹲まつた。

「チロニデスよ。俺はこれからベネベンチウムへ出發するから此の手紙を家扶の手許まで屆けてくれ。チロニデスよ。俺は旅に出るのだよ。解つたか。

チロニデスはすぐ主人の意中を察して其儘歸つた。ウルサス初め居並ぶ人々も此の卑法なる希臘人の罪を强て責めやうともせずわざ〳〵出口まで見送つてやつた。

チロニデスが去つて終ふとヴイニチウスはまた傷の疲れで眠を催して來た。うとうととすると實際と幼夢とが混亂して綾の樣に目先を彩どる。何處だか知らぬ深い森の中に大きな寺があつてその塔を守る尼さんが黃金の縱琴を彈いて居る。月光を浴びて神々しく輝いて居るのがすぐリジアであると氣がついた。

ヴイニチウスは急いで駈け上ろうとすると何處からともなく莊重な口調で「少女に手を觸れてはならぬぞ。神は未だ許し給はぬのだ」と叫ぶ。非常に息苦しい樣になつてヴイニチウスは塔の下に突つ伏して終つた。楚々たる美しい尼さんは使徒の手にすがつて塔の頂を離れた。白金のやうな光を一杯に擴げた天空へ向つて靜かに登つてゆく。ヴイニチウスは兩手を高く擧げて聲を限りに呼び止めやうとした。

自分の叫び聲で目がさめるとリジアは自分の側に默禱して居る。ウルサスが枯木を爐にくべたので火は一時に炎へ立つ。ヴイニチウスは失くしたものが再び手に入つた樣な嬉しさが胸を突いて云ひ知らぬ感傷的な涙が浮ぶ。リジアもヴイニチウスの繃帶をゆるめ乍ら、私はいつまでもあなたの看護をして居るのでございます。斯う云ふ聲も震へて居た。

冬近くになると流石のローマも淋しい風が毎日吹き廻つた。アルバン山の白雪が蒼空に際立つて輝いた。それがアフリカから吹いてくる南風に溶け初める

頃になると其處此處に菫花が芽ぐんで小鳥の聲が晴々しく響く。斯うして再び春がくると街道や公園に美しい男女の群がめつきり增えて來た。

其頃ヴイニチウスもすつかり全快して家に歸つて居た。或日ペトロニウスから使が來たので出かけて行くといつも艶やかな笑顏を見せる愛妾クリソテミスの姿がいつか居なくなつて奴隷のユニセが美しく飾つて出て來た。ペトロニウスは快活に

「ヴイニチウスよ。お前の新らしい信仰とか云ふものは近頃どうかね。俺は此の世の中を面白く美しく暮したいと思ふ。後はどうにかなるさ。これが俺の新らしい哲學だ。

「昔から云ひ古るされた哲學です。別に新らしいことでもない。

「だが俺には新らしいのだ。ヴイニチウスよ。此の美しい女がとうとう新らしい意味で俺の所有になつたんだからね。

斯う云つて腕を擴げるとユニセは其身を投げかけて首をペトロニウスの胸に

埋めた。大理石のやうな肌に薔薇の様な紅色を浸して嬉しさに震へて居る。ペトロニウスは片手で確り抱きしめ乍ら片手で卓上の香水を丁寧にその髪の毛へふりかけてやる。薄い衣を透してその柔かい春に幾度か接吻するとユニセは氣が遠くなつた様にうつとりとして眼を閉ぢる。

「ユニセやお前の髪へは花冠を着けて居なければならない。そして又美味い酒を用意してくれ。

ユニセは小鳥の様にすぐ腕の中を離れて行つた。ペロニウスは又ヴイニチウスの方に向き直つて

「酒と抱擁とは何物をも犠牲にするだけの力を持つて居る。ユニセは菫花が大好きなので俺もいつしか菫花好きになつて終つた。此の春はその香ばかり嗅いで居る。ヴイニチウスよ。お前も何か好きな花を自由にしては何うか。

「有難う、

「リジアがどれだけの價値があるか知らぬがお前の奴隷の中にも仲々美しい花

があるではないか。

「それが私には出來なくなつたのです。私にはリジアをユニセのやうには出來ません、又したくもないのです。と云ふ譯は斯ふなのです。あなたの戀は他の花から他の花へあなたの趣味を移したにすぎないのです。つまり其の變遷が感覺だけに止つて居るのです。所が私のは深い心の中に大きな變遷が來たのです。眼とか鼻とか云ふ世界からもつと自由な廣い世界へ出て來たのです。私はリジアを兩腕に抱きかゝへるよりも心の中へ大切に秘めて置く方が何だか嬉しい様な氣がします。

「お前の話は近頃だんだん解らなくなつてくるな。

「お互に全く別の事を考へて居るからなのでしよう。

（八）

ネロ皇帝は久しぶりでローマの都へ還幸した。御氣に入りのチゲルリヌスは

アグリツパ池畔で盛大な饗宴を催してこれを迎へ奉つたのである。ローマの歴史を繙いて當時の各州が屢々重税を課せられて次第に疲弊してゆく原因を數へたならば斯うした宴會の莫大な費用も必ず其の一つであつたことを誰も疑ふ事は出來ないであろう。

チゲルリヌスはペトロニウスと相並んでネロ皇帝の寵臣である。ペトロニウスがともすれば理に落ちて折角の酒を不味くするのに引き更へてチゲルリヌスは飽くまでも社交的な辭禮に巧みであつた。いつも皇帝の詩情を滿足せしむる樣な挿話を用意することを忘れなかつた。で當日も色々工夫して皇帝を初め賓客一同の意表に出やうと試みた。

やがて其日が來た。鍍金した筏をアグリツパの池に浮べて遠く東洋の方面から採集した珍らしい介殼や寶石で美々しく飾つた。池の畔には橄欖、薔薇、の花に包まれて新らしく建て並べた大理石の像が朝露にしつとりと濡れて居た。石像の陰から白鳥の形をした小舟がゆるやかな波紋をたてて漕ぎ出る。と思ふと

希臘の舞妓が艶麗な化粧で立ち上る。笛の音、琴の音、が其處から波に傳つて今にも水神の踊を誘ひ出すかと思はれた。

ネロ皇帝は得意滿面にあふれて筏に乘つた。ポプピアを初め多くの廷臣もそれに續いた。日夜の饗宴に心も身體も勞れ果てた廷臣はまだ夢の裡を辿る樣なうつとりした眼差で食卓の兩側に就く。ヴイニチウスも其中に交つて居た。その頃ローマ唯一の逞しい肉付きを誇りとして若々しい軍人の羨望を恣にしたヴイニチウスの風采は居並ぶ人々から殊に際立つて見られた。然し今までの豐滿な兩頰が少し憔悴れて眉間に一抹の曇が出來て居るのに氣のついた人は少なかつた。で折々起る樂の音の騷々しさを嫌ふ樣な風に兩手で額を抑へたりなどした。が其の惱ましい氣な樣子が却つて婦人達の眼を曳いてポプピアさへ惚々と其の横顔に見入つた。

亞弗利加あたりから送られた春の翠色な腹の赤い小鳥が銀色の糸に繋がれて小舟の舷に舞つて居る。五月の初めで太陽が赤銅色の大きな姿を森の頂に見せ

ると急にあたりの波が眞赤に炎え初めた。小舟が搖れると眞赤な波紋が黃金色にくだけて小舟の飛び交ふ翼へ玉の滴を注ぐ。腰から下を羊のやうに裝ふた道化役者はわざとらしい手付きで草笛を吹く、それを追ふて裸體の女神が叢から叢へと見えがくれする。その道化た容子に一同の笑聲が夕立の樣に起つた。

日の影が全く沈むと森から汀へかけて無數の燈火が一時に輝いた。大理石で高く築きあげた樓臺には全ローマの美しい女が狩り集めてある。娘と云はず人妻と云はず何れも今宵一夜の歡樂を皇帝の名によつて解放されたのであつた。雪の樣な肌を闇の中にくつきりと浮かせてあらゆる媚と嬌態とを衆人に投げた。

ネロ皇帝は酒に熱した顏を徐ろにあげて侍臣に囁くとやがて筏は音もなく岸へつく。醉步滿跚として廷臣等が之につゞく。ヴイニチウスの腕に倚りかゝつて居たポプピアも殘り惜しさうに身を起す。皇帝が深い森の中になぞらへた天幕の中へ入ると賓客のどよめきは一しきり甚しくなつて男女の笑ふ聲、叫ぶ聲、

喘ぐ聲、が其處此處に聞える。燈火は消され音樂は止んでローマの夜は今しも歡樂の囁きに醉つて終つた。

ヴイニチウスは一滴の酒も口にしなかつた。舞妓の一隊が幾度かヴイニチウスの側を過ぎた。その白い腕を擴げて丁度羚羊が物におびえて飛んでゆく樣に二三間走り過ぎては一寸顧みて艷やかに笑ふ。濃厚な香料の香と重苦しい肌の香とが其のあたりに漂ふ。ヴイニチウスの胸は怪しく炎え痛ましく鳴る。自分もつい昨日まで斯う云ふ群に交つて居たことを思ふと非常な輕侮の念と嫌惡の情とが起る。美しい花は皆薔薇であると考へて淸い百合の花のあることに氣が付かなかつたのが恥しい。地上に輝く燈火のゆらめきに醉ふて天に輝く無限の星を忘れて居たのが恥しい。ヴイニチウスは早く此處を逃れて被の自由な新鮮な空氣を心ゆくまゝに吸いたいと思つた。

「ヴイニチウス樣。さあ、彼方へ參りましよう、覆面の女が肩に手をかけて言葉忙しく囁いた。

「誰です。放して下さい。
「判りませんか。私です。さあ。今宵は凡ての事が許されて居ます。彼方へ參りましよう。
熱した唇をヴイニチウスの唇へ向けたとき恐ろしい恥辱と嫌惡とを感じて力強く押しのけた。途端に叢の藥がゆれて人影が射す。覆面の女は植込の中へ去つた。
「あの女を知つて居るか。
斯ふ云つて嫣然現れたのはペトロニウスであつた。
「舞ひ姫でしよう、
「いや。とても解るまい。あれは皇后さ。ポプピア樣だ。
「えつ。
「俺が機會よく通り合せて好い事をした。でないと何んな返報を受けろか知れやしない。

「返報ですと」。ヴイニチウスは思はず憤怒の聲を洩して植込の方を泌と見つめた。「皇帝。皇后。ローマ帝國。それが何れだけの權威があるのか。俺は誠の道の爲めに生きて行くのだ。自分の信仰のために生きて行くのだ。
「何だ。信仰の爲めに、
「そうです。私はリジアをを愛する爲めに生きてゆくのです。
「それがお前の信仰に何んな關係があるのだ。
「リジアの清い心を私は固く信じて居るのでず。
「お前は基督信者になつたのか
「いゝえ。未だです」。ヴイニチウスは撫然として腕を組んだ。「自分は未だ基督信者にはなれない。」
ペトロニウスは自分と甥との間に深い淵が出來たやうに感じた。ヴイニチウスも何か物悲しい感じが胸一杯になつて其儘急いで家へ歸つた。
翌る日チロニデスが訪ねて來た時ヴイニチウスは庭を散歩して居た時であつ

た。

「殿様。御早ふ存じます。

ヴィニチウスは物憂さ相に默つて肯いた。

「殿様。世が澆季になりますと美しい日や月が缺けて來ます。哲學者の髪も白くなつて涙が黄ろく光ります。ヘラクリタスが……

「何にしに來たのだ。用を云へ。

「殿様。やつとリジア様のお住居が知れましたので。

「何處に居るのだ。

「リヌスと云ふ爺さんと御一緒でございます。もう餘程の老人で町はづれの一軒家に住んで居ます。それにウルサスは暮れ方から水車場へ稼ぎに出ます。殿様。あなたの奴隷はあなたの一言ですぐ其の家を圍んで終ふことが出來るのです。

「チロニデスよ。確かに然うか。

「殿様。私は私を援けてくれた基督信者からそれを聞きました。

何と云ふ好い機會が廻つて來たのであろう。自分がローマ貴族の權威をもつて一度命令を下せばその哀れな一軒家は十重にも二十重にも圍むことが出來る。リジアはもう自分の掌中に入つたのだ。リジアを手に入れた歡喜の情は彼等の信仰と祈禱とを犧牲にして猶餘りあるであらう。リジアはもう自分の掌中に入つたのだ。今宵わが掌中に眠るのだ。斯ふ云ふ感じと共にヴィニチウスの血は一度に煮え立つた。

「だが俺は神の名によつてリジアを犯さないと誓つたではないか。基督の名によつてそれを誓つたではないか。

リジアが自分を助けてくれた其の德に報ゆるために自分はリジアの黒髪を引きづつて自分の寢臺へおし込めて好いものか。斯うして自分はリジアの身體を自由にすることは出來やう、然し其の崇高な心をどうして自由に出來やうか。身體を愛する者は身體を自由にして滿足するであらうが心を愛するものは心を

自由にしなければならない。其處に限りない光榮と永久の祝福とが溢れるのだ。ローマ貴族の權威と幾百の奴隷とそれ等が何にならう。リジアの誠の心を得るにはやはり誠の心を以て迫らねばならない。斯ふ考へ直したヴイニチウスは慄然として震へた。

「チロニデス。お前は基督信者を賣つた憎べき者だ。笞が相當する。

家從や奴隷はチロニデスを牢屋へ曳きづつた。笞の風をきる音と肌を打つ響が聞へてくる。ヴイニチウスは凡ての惱煩の誘惑に打ち勝つて憎むべき內應者を斥けたと云ふ誇りで心よく窓の外を眺めた。木の葉、草の葉、皆よろこびの色に輝いて靑々として居る。つい此の間まで何も見えなかつた黑い土の上に若草の嫩葉がむくむくと頭を擡げて居る。若いつや〳〵した光は自然の光榮を心かな讃美して居る樣に思はれた。ヴイニチウスは急に氣が輕くなつて流れゆく白雲をなつかしげに見送つた。それと同時にヴイニチウスの胸に又一つの不安が萌して來た。チロニデスを笞打つと云ふことを果してリジアが喜ぶであらうか。

（九）

基督信者は正當に罪ある敵をも喜んで許してやるではないか。斯う思ふとヴイニチウスはすぐチロニデスの縛を解いてやれと命じた。チロニデスは靑ざめた面に嬉しさの涙を浮べて

「殿樣。有り難う存じました。

「チロニデスよ。私は基督の聖名に依つてお前を許してやる」。ヴイニチウスは少量の葡萄酒と食物とを與へ乍ら、「私と一緒に行つてリヌスの家を案內してくれ。そしてそれでお前のする事はもう終つたと思つてくれ。ペテロの事も、リジアのことも、ウルサスの事も、もう忘れて終へ。基督信者の秘密を探るのはもう止めて終へ。好いか。永い間御苦勞だつた」。

「えゝ。ですが殿樣。私は哲學者なので……

「解つて居る。だから毎月俺の家へ來れば金貨二片だけは必ずやる。

ヴイニチウスは先づミリアムの家を訪れた。丁度タルソのポーロや多くの信者が食卓を圍んで居たのでヴイニテウスは、あなた方の信じて居る基督の名に依つて挨拶する旨を述べて一揖した。

「私はあなた方の御恩をうけた者、今日はあなた方の友人として參つたのです。

「わたし共も親愛なる同胞(はらから)としして御挨拶申します。おかけ下さい。

「感謝致します。

「夕飯は、

「有難う存じます。

ヴイニチウスは荒削りの食卓へ貧しい皿を控へて快よく坐に就いた。ヴイニチウスはペテロに向つて自分の來意を心置きなくうち明けた。自分はすぐ向のリヌスの家にリジアの居ることを敎へられた。で自分の奴隷五百人と自分の侍臣數十人とはいつでも自分の命令で動かすことが出來る。けれども自分はそ

れがリジアの心を奪ふのに何の權威もない事に氣が付いた。

「あなた方の訓(おし)へてくれた信仰は私の腕力を鈍(にぶ)らして終つた。腕の力や鐵の力以外に目に見えない或る力が自分を導いてゆく。ペテロ樣。私は幾度かそれと戰つて見た。が自分はやはりその力に屈服してゆかなければならない。」

「あなたの心に平和の光が射(さ)して來たのです」

一で今日私は貴殿(あなた)がたにお願に來ました。私はリジアを正當の妻にしたいと思ひます。私はリジアと一緒に基督を讃美したいと思ふのです。

一座は耳を傾けた。ヴイニチウスはペテロの敎を眞面(まとも)に見つめたまゝ

「わたしの心に今疑惑の中に漂ふて居る。ほんとうの愛とは何か。ほんとうの力とは何か。私はローマの金殿にも玉樓にも昔の樣な樂しみを知ることが出來なくなつた。希臘は知慧と美とを生みローマは皇帝と權力を生んだ。と斯う人が云ふ。けれども何處から誠の愛が生れて來たのか。それを誰も敎へてくれなかつた。それを眼の前に示してくれたのはあのリジアでした。それを

耳に傳へてくれたのはあなたでした」。ヴイニチウスは何物かを追求する様な眼差を窓の方へ向ける。「けれ共私には未だ何か物足らない」。

「誠の愛は眞理から生れる」とペテロが答へる。

「誠の眞理は永久の光明から生れる」とタルソのポーロが付け加へる。

「その光明は何處にあるのです。私はそれが知りたい。

「門を叩くものは開かれん。主の惠は爾の上に垂れて居る。天國の門を叩け。光明は爾の上に輝くであろう。

ヴイニチウスは彈かれた様に座を滑つて膝まづいた。見よ。何たる變異ぞ。ローマの貴族が野蠻人として禽獸視したるガラリア人の手に感謝の接吻をして居るではないか。青年の眼は感激の涙にぬれ老人の手は歡喜の情に震へて居る。やがてヴイニチウスは首をあげた、

「私は明日にでも皇帝の供奉をしてアンチウムへ行かなければならない。臣下としてそれを拒むことは出來ない。どうか私と一緒にアンチウムへ來て下さ

いませんか。いゝえ何等の危險もありません。宮廷の内にも軍隊の内にて多くの基督信者が居ます。どうか私と一緒に來て下さい。

ペテロは其請を快よく入れてタルソのポーロが派遣されることになつた。ヴイニチウスは猶も言葉を繼いでリジアに一目遇つて行きたい。それを許してくれ。と賴んだ。

リジアはペテロの使に何氣なく室に入つたときヴイニチウスの姿を見て一寸立ち止つた。面を赧めて靜かに頭を垂れた。ペテロは慈愛の眼を以てリジアの肩に手をかけて

「リジアよ。此の人を知つて居ますか。此の人を今でも愛して居ますか。

リジアは昂まる胸の動機を兩手で抑へたまゝペテロの足許に膝まづいた。薔薇の様な唇が幾度か震へた。

「愛して居ります。

ペテロはヴイニチウスとリジアの頭へ兩手をのせた。「主よ、光榮ある二人の

上に惠を垂れ給へ。」一同も基督の名に依つて二人を祝福した。窓から射しこむ日の光がペテロの半面を照して餘光は小雨の如く室(へや)一杯に降り注いだ。

ヴイニチウスはリジアに今の自分の心持をすつかり打ち開けたいと思つたが何と云ふ言葉で云ひ現はしたら好いか解らなかつた。歡喜、聖喜、光榮、法悦、いろいろの單語を並べて見たが思はしくない。只胸の鼓動がはげしく鳴つて金色の光が頭の裡を縱横に廻轉した。

夕べの鐘が鳴り初めた頃ヴイニチウスは歸路に就いた。途でペトロニウスに遇ふといつもの樣な元氣な調子で

「何か嬉しさうな顏をして居るな。俺は今本屋へ行つて來た。アンチウムへ御供すると又退窟で困るからな。セネカの新刊物とバージルの著書を買ひ集めたいと思ふ。何しろ愈々明後日の御出發と決定したんだからな」。ペトロニウスは獨りで喋つて居たが急に氣を變へて。「皇帝は非常な疳癪もちになつた。頻りにローマを呪つて居る。此の不快な都を出て早く海岸へでも行きたいと

毎日不平を云つて居るのだ。」

「アケヤへでも往かうと云ふのですか。」

「何處(どこ)でも好いのさ。それに皇帝は自分で詩人になつたり神になつたり色々に變るのだからな。

遂々ヴイニチウスの邸へ來たのでペトロニウスもすぐ客間へ通された。ペトロニウスはローマの人間を花から花へ渡つてゆく羽虫にたとへて其の痛ましい生活を哀れんだ。

「人の生命は朝露の一時を誇るやうなものだ。まあそれも仕方がないのだろう。ヴイニチウスよ。ユニセを呼んでくれぬか。一緒に琴でも聞かう。

ヴイニチウスはすぐ使者を出してから又坐に就いて

「此の世の中は皇帝の力ばかりで生きてゆくのではない。ローマが世界の全部ではない。

「何か心配でもあるのか。

「いゝえ。私は幸福な身の上です。

「どう云ふ意味で。

「私はリジアと婚約をしました。

ヴイニチウスは邸中の奴隷を大廣間に呼び集めた。嬉しさと感謝とで充血した顏を一同の者に向けて兩手を高く前方へ突き出した。

「此の邸に永く勤めて居たものは明日役所へ屆け出て自由の身となるが好い。まだ新參のものには金貨を取らせる。牢獄の囚人も皆解放してやれ。生きとし生けるものは皆自由でなくてはならぬ。」

奴隷は何も云はずに皆ヴイニチウスの足許にひれ伏した。嬉しさの涙が一杯になつて一言も云へなかつたのである。ペトロニウスは默つて之を眺めて居たが

「お前はどうしてもリジアを得たいと思ふのか。それも好からう。だがヴイニチウスよ。アンチウムに往つたらポプピアに氣を付けるが好い。あれは人一

倍復讐が好きだからな。

「ローマや皇帝の權力はもう私の髪の毛一筋さへ自由にすることは出來ないのだ。

「そんな事を誰が信ずるものか。

「使徒ペテロが信じて居る。

「お前は基督信者か。

「早く然う名乘りたい。世界の人々に向つても又自分の心に向つても。

（十）

ネロ皇帝はサイプラス女神の美しさを讃美して縱琴の一曲を終つた。途端にあはたゞしい使者の聲がして

「陛下。火事が。火事が。ローマの都が焰で包まれて終ひました。

侍臣等一同立ち上つた。ネロ帝は待ち設けて居たやうに莞爾として縱琴を下

に置いた。ネロは嘗て詩曲を作つたときどうしても大火の趣きを出すことが出來なかつたのである。プロメセウスが火を人間に授けたにしても希臘人とプリアムと戰爭をしなかつたならばトロイも燒けずに濟んだらう。トロイが燒けなければホーマーの「イリヤッド」も出來なかつたらう。「イリヤッド」に詩を敎へたアケヤ人は幸である。本國の都の花やかな滅亡を見たプリアムは幸である。藝術の爲めには凡てのものを犧牲にして惜しくない。斯ふ考へて居たのである。

ネロは左右を顧みて

「これからすぐ出發しやう。俺はトロイの歌を作らなければならない。

「陛下市民は烟に窒息いたし狂氣いたして居ります。ローマは今や火の海となつて終ひました。

「さうか。チゲルリヌスよ。お前が敎へてくれた偉大なモデルを俺は感謝しなければならぬ。

ネロ皇帝は遙か天外に向つて

「あゝ禍なる哉。うつくしきプリアムの都。

と長大息を洩した。詩情を透した自分の誇が滿面に漲るのを覺えたのである。

その晩は星の美しい靜かな夜であつた。ヴイニチウスは疾風の如く駿馬に鞭打つてローマの市街へと馳せ向つた。馬も騎手も夢中になつて道路から草原へ、草原から丘陵へ、ひた馳りに馳つたのである。やがて行く手を塞つた紅の反映が明け易き七月の天地を彩つたのを見たヴイニチウスは殆んど狂亂に陷り馬の轡を攫んでは頻りに馬蹄の遲きを恨んだ。

ヴイニチウスがローマ街の入口に近いた時は押し返へし寄せ返へす群集が異口同音にネロ皇帝の暴逆を罵倒して居た。放火者の皇帝、親殺しの皇帝、などと云ふ聲々がヴイニチウスの胸に一々應へて來た。見よ。大火は炎々として天を焦し地を燒いて居るではないか。親を失ひ兄弟と離れた老幼男女はあまりの驚愕にもう涙も無くなつて只紅蓮の焔に見惚れて居るではないか。昨日まで華やかなる人生を嘔歌して居たローマの都が今宵一夜に一大火葬場と化し了るとは

誰が豫想し得たであらうぞ。

ヴィニチウスは煙塵を吐いて崩れる殿堂の裡に馬を停めて暫く群集のどよめきに躊躇したがすぐ我と我心に鞭をあてゝタイバーの河向へと馳せた。リジアの安否を思ふと心は身に添はず身は馬に添はずたゞ夢の裡を浮かれてゆく樣に思はれたのである。

ローマの都は愈々燒ける。何某の邸宅、何某の道路、何某の寺院、は恐ろしい火柱を眞すぐに立てゝは皆灰燼に歸して終ふ。市民の多くは家を燒かれ財を奪はれて狩夫に追はれた小鹿の群の如く其處此處へと逃げ迷ふた。二日目の曉頃になると飢餓と寒氣とに攻められて

「パンを與へてくれ。宿所を與へてくれ。

「何故ひと思に此の身を燒かぬのか。

斯ふ云ふ叫喊が潮の樣に響く。皇帝も貴族も軍人も皆一樣に呪詛の聲々を以て迎へられたのである。

ネロ皇帝は一萬數千餘人の軍隊に護られて步武肅々として設けの高臺に到着した。眼をあぐれば紅雲赫々として照り渡り目を伏すれば焰海炎々として涌き立つて居る。紫衣を着て黃金の冠を戴いた皇帝詩人は欄干の端に卓然として立ち上つた。焰は今しも一陣の風にあほられて女の髮の水中に漂ふが如くうねりうねつて八方に傳つてゆく。トロイの滅亡も此の凄壯なる光景にはいかで比し得べき。斯ふ考へてネロは歡喜の情に胸が一杯になつた。縱琴の弦を一彈き彈いて讃美の一曲を歌ふ。

群集はこの暴逆なる皇帝の態度に幾度か憤怒の叫喊を擧げた。さはれ。些々たる群集の怒號何かあらん。數歲か後にはたゞローマの大火と之を讃美したる空前絕後の悲劇詩人ネロの名のみが多くの詩腸を鳴らすであらう。斯と考へてネロは益々彈琴の手を高めた。彈琴の音の昂まるにつれて群集の叫喊は愈々はげしくなつた。

ペトロニウスはネロ皇帝の命を受け悠然白馬に跨つて群集の裡に步を進め

た。

「ローマの市民よ。諸君の愛するローマの街々はやがて美しく再建せらるるであらうぞ。皇帝は未曾有の餐宴と演技とを諸君のために準備して居らるるのである。ローマ市民よ。諸君は明日より更に豐富なる生涯を送ることが出來る。諸君よ。諸君は皇帝の德を讃美しなければならない。

ペトロニウスの颯然たる風姿と流暢なる辯舌とは狂い立つた群集を鎭撫することが出來た。で多くの人々もそれぞれ散り初めたのである。

ヴイニチウスは途に使徒ペテロに遇つて漸く安心したが焔はタイバーの河向ふへも浸々として進んで來た。ペテロはヴイニチウスを顧みて

「リジアと其の忠僕は彼方の小舍に避難して居る。神はあなたを彼處へ導いて下さるであらう。

斯ふ云つて其處へ案內してくれた。ヴイニチウスが其の小舍の戶を開けた時は丁度リジアが夕食の仕度に忙がしい時であつた。リジアは驚愕と喜悅で一言も

云へず只默つてヴイニチウスの胸に身を投げ懸けた。ヴイニチウスは兩腕に小羊の樣な其の柔肌を抱いて幾度か接吻した。

「よく無事で居て下すつた。もう斯んな騷々しい都にあなたを置くことは出來ない。私はあなたと何處か安らかな島へでも逃げて行きたい。

「妾はもうあなたの所有です

斯ふ云つてリジアは思はす面を赧めた。ローマの女が人妻となる時に用ふる言葉がついロ走つたのを處女の謹みとして恥かしかつたのである。ヴイニチウスは熱情に炎えたつリジアの身體を胸へ引き寄せて火焔に反映する天空を遙かに見遣つた。痛ましい焔によつて滅ぼされるローマの都に悲しい決別の意を注いだのである。

使徒ペテロは淸水の溢れる器を捧げてヴイニチウスの頭に聖靈の水を注いだ。ヴイニチウスは感激の涙を流してその厚意を謝した。

「憐れむべきローマの都はネロの呪に依つて燃えて居る。皇帝の呪はローマの

街を燒くだけで滿足しないであらう。必ず其の市民を屠り其の血を見なければ止まぬであらう。市民が受ける災厄の最初の犧牲は先づ貴老がたの身の上を襲ふて來るに違いない。貴老がたは一刻も早く此の都を見捨てゝ他の國へ行かれるが宜い。

ペテロは暫く沈默のまゝ窓の方へ身を寄せた。バチカンの平野から遠叫びの聲と物凄い光とが傳はつてくる。やがて首をあげて

「キリストの遺された言葉を私は何處までも守らねばならない。キリストが三度我々に繰り返へして、わが憐れなる小羊を牧へ、と誡へられたその言葉を守らねばならない。

(十一)

ローマの大火に群集は狂ひ騒いだ。ペテロニウスの辯舌で一度は鎭まつたが其の怒を全く除くことは出來なかつた。で皇帝は延臣を初め寵愛を受けて居る

男女を一堂に會して幾度か其の善後策を議したのである。御氣に入りのチゲルリヌスや愛妾のポプペアなどはこの大火の罪を基督信者に負はせやうとした。希臘人の哲學者チロニデスも詭辯を弄して色々と言葉を添へたので皇帝も遂々その議を採用することに決心した。憐れなる基督信者は恐るべき放火の大罪を以て問はるることになつたのである。

ヴイニチウスは之の決議を聞いた時非常に驚いた。すぐ馬に鞭あてゝリジアの隱れ家を訪ふたが時已に遲かつた。リジアは其日の午前に囚人の身となつてマメルチンの牢獄に繫がれて居たのである。牢獄は十重にも二十重にもいかめしきローマ軍士の爲めに警固されて居て蟻の匍ふ隙さへも無かつた。

ヴイニチウスは軍士に意を通じてリジアに面會したいと賴んだが頑として承知してくれなかつた。で百人の長の許に哀願して僅かに手紙の往復だけ出來ることになつた。それをせめてもの慰安として牢獄の門を出たのは最う日が餘程高くなつた頃で煎りつく樣な暑さは眼に泌みて痛い。一筋道の廣い街道を逞し

い埃及人に轎を擔はせた行列が通る。

「殿様の行列だ。道を開けい。

ヴイニチウスは沈思の幻影から急に現實にひき戻された様に側に歩み寄り乍ら轎の中を仰いだ。それは手に卷物を擴げ乍ら悠然と構へた哲學者であつた。

「おゝ。チロニデスよ。

哲學者はヴイニチウスだと云ふことに氣がついて一寸驚きの眼を擧げたがやがて自分の沈着な誇を見せやうとして

「私は忙がしい身體だ。これから重大な用件で友人チゲルリヌスに會ひにゆかねばならぬ。

「チロニデスよ。お前がローマの基督教徒を賣つたのか。リジアを陷れたのか。

チロニデスは轎の前棒に手を掛けたヴイニチウスのいらいらした姿を輕蔑する様に見下した。そしていつぞや自分を笞打つた事などを皮肉な言葉で述べて其儘轎を急がせた。チロ・チロニデス様の御轎だ、道を開けい、と云ふ露拂ひの

聲が重く響いてゆく。ヴイニチウスはその後を泌々と見送つて、自分の愛が足りなかつた、と悲しげに首を垂れた。

牢獄を守る百人の長は基督信者に厚意を持つて居たのでヴイニチウスとリジアの手紙は滯りなく相傳へられた。お別れ申してより只只主の惠みとあなた様の御心にすがりて嬉しき月日を送り居り候ひしにはからずも此の牢獄につながれ候こと仲々に口惜しう存じ候。さはれやがて此身の刑場に曳かるるはうるさき浮世を脱れて天國の自由を得ることゝ存じ候間何事も苦しうは思ひ候まじと心定め申し候。我等が主は使徒の唇をかりて妾と御身とを相許し下され候ひし事なれば只一目にても御目もじ致してやさしき御言葉戴きたしと女心の流石に亂れ候こと御許し下され度候、斯ふ云ふ意味の長い長い手紙を受け取つた時ヴイニチウスの胸は千々に碎けて暫く机の上に突つ伏したまゝ涙の枯れるまで首を擡げることが出來なかつた。

ローマの燒跡に先づ起工された大建築は大きな圓形闘戯場であつた。幾千の

人夫が晝夜にかけて工事を急いだ。その工事の進渉(はかどる)につれて基督信者(クリスチヤン)の運命が且夕に迫つてゆくのである。基督信者(クリスチヤン)を獅子に與へよ、といふ市民の聲々は皇帝の虚榮心をも滿足せしむるに充分であつたのである。各地方から驅り集めた猛獸は檻の中に血に飢えて居る。

やがて闘技の日が來た。幾つかの演技が終つてから愈々群集の觀客は熱狂した。

「基督教徒を出せ、基督信者を出せ。

重い鐵門を開かれると悠陽たる讃美歌の聲が響いて來る基督の聖名(みな)を稱へて多くの人々は闘技場の中央に曳き出された。何等の恐怖もなく何等の苦惱もなく光榮ある天國を讃美して一同は跪いて祈禱をする。途端に一方の入口が開かれると幾十の獅子は爛々たる眼と煌々たる牙を輝かせて靜かに現はれた。暫く場内を見廻して居た猛獸はやがて奮然として讃美歌の聲に狂ひ初めて祈禱の眞中に飛びこんだ。またゝたく暇(ひま)に前足と牙とは鮮血の滴りで眞赤に染つた。

斯ふ云ふ血醒い刑罰は幾回も行はれたがそれにも飽き足らず遂に火刑(ひあぶり)の大慘狀を現出するに到つたのである。

ローマの都の其處此處に數多の火刑柱が建てられた。まだ花耻かしい處女の身でも漸くつかまり立ちの出來る赤兒でも基督信者(クリスチヤン)と云ふ單なる理由の下にその火刑柱へ縛せられた。母の乳を求むる孤々の聲が低聲の讃美歌に交つて彼方此方に響いて來る。夕闇が肌寒い風を誘ふて地面一杯に擴がつて來ると炬火(たいまつ)を手にした奴隷が其の間々を織る樣に往來する。やがて劇曉たるラッパの音が聞へてくると火刑柱に設けられた藁束に火焔(ほのを)を移した。火焔は殘逆に勝ち誇つた暴君を讃美する樣に紅蓮の舌を炎々と靡へす。燒け焦(こ)げる髮の香と燒け爛(ただ)れる肉の香とが四面へ漲つて流石の市民も眉をひそめた。

ネロ皇帝は白馬の兵車を驅つて現れた。チゲルリヌスとチロニデスが左右に侍して居て樂の音と杯の響が絶え間なく起る。兵車は靜かに火刑柱の間を辿つた。丁度一段高い柱の前へ來た時に一陣の風は濛々たる煙を吹き分けたので白

髪の老人が眼を空さまに向けて祈禱して居ゐ姿がくつきりと見えた。焔は今しも腿のあたりををかして居る。此の老人こそ嘗てチロニデスがウルサスを煽動して暗殺しやうと思つた醫者である。自分の舊惡を葬らんが爲めにあらゆる迫害を加へた其男である。然も自分を恨むことなく喜んで自分を許してくれた男である。それが今しも殉教者として光榮ある最後に際して居るではないか。何と云ふ立派な姿であらう。何等の恐るる所なく靜かにキリストを讃美して居る其の神々しさ。チロニデスは殆んど混亂するばかりの感激に打たれた。

「おゝ。惡かつた。惡かつた。どうぞ許してくれ。

夜は全く更けて焰の光は血の樣に赤い。柱にもたれて靜かに瞑目して居た殉教者は微かに首をもたげた。

「キリストの聖名に依つて、私はお前を許す。

チロニデスはもう堪え切れなくなつて柱の下に兩手を擴げた。柱は焰に包まれて一しきり明るくなる。居並ぶ人々はチロニデスの狂はしげなる態度を冷や

かに眺めた。チロニデスは熱狂した聲で。

「ローマの市民よ。罪なき基督信者は火刑になつて居る。ローマの市民よ。まことの放火者は此處に居るのだ

右手を眞直に伸ばしてネロ皇帝を指さした。市民の群集は一度に視線を車上の皇帝に注ぐ。罪なき者の迫害者。親殺し。放火者、と云ふ叫喊が潮の寄せる樣につづく。あまりの昂奮にネロはおそれを抱いて其儘宮殿へ引き返した。

チロニデスは半ば氣拔けのした身を再び柱の下に横へて恐ろしかつた過去の罪を幾度か幾度か嘆いた。よろめく足を踏みしめて立ち上つたときタルソのポーロが何處からか姿を現した。チロデニスの肩に手をかけて

「侮ひ改めよ、お前は許されたのだ

「おゝ。私は許されるでしようか。この罪の深い私が。

「殉教者が死ぬる其の際にお前を許したではないか。

ポーロは昏亂したチロニデスの首をやさしく抱いて天空の星を仰いだ。

「我々の救主よ。この憐れなる者を救ひ給へ。我等の罪のために尙き血を注がれたる主よ。この憐れなる者を救ひ給へ。

斯ふ云つて側にある泉水の水を掬つてチロニデスの頭に注いだ。

チロニデスが悄然として歸宅したのは明け方近くであつた。チゲルリヌスの軍隊は有無を云はさず之を捕縛して宮殿の一室へ囚へた。チゲルリヌスはネロの命令を受けて嚴しくチロニデスを責めたのである。

「お前は明日の朝あの高臺に登つて誠の放火者は基督信者であることを述べなければならぬ。酒の醉で皇帝の名を汚したことを白狀せねばならぬ。

「私には出來ない。

「何故出來ない。貴樣はあの恐ろしい火刑柱を知らぬか。

「私は基督信者でございます。

「犬、たわけ者。

チゲルリヌスはチロニデスを市民の前へ曳き出して十字架にかけると獄卒は

猛獸を其の前に繫いだ。荒れ狂ふ獸の鎖を控へて

「チロニデスよ。前言を訂正せよ。

「出來ません。

鎖を放すと肉に飢えた猛獸はその胸に飛びつく。と寂然たる群集の中から沈んだ然も力のある聲で、殉教者に幸あれ、と響いて來た。

(十二)

リジアは病に侵されたので獄舍を更へた。で暫くの間を獅子の餌から免れることが出來たのである。ヴイニチウスは其の間に一日でも遇ひたいと樣々に苦心して見た。莫大な賄賂を獄卒に與へたので賤しき人夫の姿に化けて漸く薄暗い獄舍の裡へ入ることが出來た。幽かにゆらぐ燈火の間々に廋せ衰へた人々が同じ枕に呻吟して居る。はげしい熱病のために唇も眼も乾き切つた人々が呻にして死を俟つて居る。ヴイニチウスは室から室へ惡臭を追ひ乍ら一々人の

顏を覗いて歩いた。丁度四番目の部屋へ來たときウルサスの姿を見つけたので、躍る胸を控へて其側に跪く。リジアは微かに眼を開いて。

「おゝ。マークス樣。あなたをどんなにお待ちして居たでしよう。

ヴイニチウスは輕くリジアの身體を抱き上げた。

「マークス樣。わたし最う死にますの。わたし死んでも何んにも恨はありません。あなたに愛して戴いたのですもの。わたし喜んで死にます。わたしはあなたの妻ですもの。

リジアは熱した頭をヴイニチウスの腕に横へて昏睡する。此の儘にして置いたらば早晩リジアの命は絶えるのであらう。此の濕り勝ちな地下室と此の不淨な空氣とは逞しいウルサスの筋肉をも細らしたではないか。楚々として風にも堪えない樣な少女の身がどうして永續きが出來やうぞ。

ヴイニチウスは叔父ペトロニウスの許に馳せつけて幾度か歎願した。然し殘逆なるチゲルリヌスと悲劇を好むネロ皇帝とは却つてヴイチニウスの煩悶を面

白がつて居た。それにはポプピアの嫉妬も手傳つて居たことは勿論である。

ヴイニチウスの花嫁たるべきリジアの美しさが宮廷の噂に上つてからあられもない取沙汰が其處此處に傳つた。やがて特別に工夫された闘技が近い中に催されると云ふ布告がローマ市民の好奇心をいたくもそゝり立てた。でそれが必ずリジアに關係した事であるとはヴイニチウスにもすぐ解つた。

最早絶望の淵に臨んで居る。どうかうしてリジアを助けたいと云ふ考は一變してどうかうしてリジアと共に死にたいと思つた。凡ての迫害に眞面に向つて行かう、自分の固い信仰で其の迫害に斃れやう。斯ふ決心してヴイニチウスは其の日の闘技場へと急いだのである。

數組の闘技が終つて殊別の合圖が傳はると暗い坑の中からウルサスが曳き出された。人並すぐれた體格は市民の血を好む性癖を煽り立てゝ、獅子を與へよ、と云ふ聲々が急雨の樣に起る。ウルサスは場の中央に跪いて靜かに祈禱する。凡ての物に平和あれ、と讃美した、玉座近くの扉を開くと巨大なる牡牛が狂ひ

に狂ふて躍り出た。充血した眼は明かに血を欲して居る。肉を望んで居る。空さまに振り立てた一對の角には裸體の處女が縛られて居た。

「おゝ、リジア。

ヴイニチウスは昏亂しやうとしたのを父叔の腕によつて僅かに差へられた。靜かに立ち上つたウルサスの顏は火の様に炎えて驀然と其の前を塞ぎつた。兩腕を伸べて一對の角を力一杯に抑へる。獸も人も地から生へた様に暫くは靜止した。筋肉は震へる。髮の毛は逆立つ。觀客は寂然として夢心地になつた。

ウルサスが牡牛の頭を捻じ挫いてリジアを兩手に抱き上げたとき市民は初めて夢から醒めた様に同情の叫喊を擧げた。ヴイニチウスは歡喜のあまりに柵を超えてウルサスの側に飛んで來た。自分の上衣を脱ぎ捨て嘗てアルメニアの戰で受けた傷痕を市民に示した。自分がローマの爲めに盡した凡ての功績の酬ひとして此の處女と此の忠僕とを救ふてくれ。斯ふ叫んだ時は市民は一齊に稱讃の意を以て迎へたのである。

市民が悲壯なる光景に感激した熱情は遂にネロ皇帝をしてリジアを許さねばならなくした。チゲルリヌスは事志と違つたので其の慘酷の手は一層甚しく狂ひ初め三日以内に再び全ローマの基督教徒を一網に捕へよとの命令を發したのであつた。殊にペテロとポーロとが此の街に潜んで居ると云ふ事がチゲルリヌスの耳に入つたので追窮は愈々峻烈を極めたのである。ヴイニチウスは急いで其旨を二人の使徒に告げて速かに此處を逃げてくれと勸めた。自分と一緒にシリー島に幸福なる餘生を送ろうと勸めた。

ペテロの眼は涙に濕つた。昨日まで天國の光榮を讃美して居た多くの信者は魔軍の手に斃されて殘骸徒らに猛獸の腹を肥やしたに過ぎない。昨日まで繁茂した信仰の芽は一朝にして大火に燒かれて終つた。最早ローマには希望がない。綠濃きガラリアの森へ行つて鏡の如きチベリウスの湖を辿つて平和の主を讃美するより外に仕方が無いと考へた。

翌る朝早くペテロは一人の從者をつれて旅に上つた。東の空は微かに黃ばん

で一抹の紅雲が夢のやうに棚びく。それがやがて金色に輝き初めたときペテロは丁度カンパニアの谷を望んで岡の項に立つたのである。金色の光は森を超へ林を透して赫灼と照り渡る。ペテロは其の光を一杯に浴びて靜かに眼を放てば濛朧として主の影が浮ぶ。

「おゝ基督よ。我が主よ。何處へ行く。(クオ、ヴアヂス、ドミネ)

「お前が私の愛する民を捨てゝ去るから、私は再び十字架を背負ふてローマに行くのだ。

ペテロは慄然として踵を返した。おゝそうだ、殉教者の血に染められた此の聖淨なる土地をどうして見捨てることが出來やう。滿腔の熱血を漲らしてペテロは再びローマの都に戻つた。殉教者の尊き血潮を讃美して光榮ある信仰の自由を天地に向つて呼號したのである。かくて皇帝の權力と暴力とは此の憐れむべき使徒の骨肉を裂くことは出來たであらう。然し乍ら其の滴々の血潮がローマの土地に美しき花を咲かせることを拒むことは遂に出來なかつたのである。

ヴイニチウスはシシリー島に平和の月日を送つた。ウルサスが小舟を浮べて網をうつと魚鱗は閃々として銀色に輝く。それが美しいリジアの手に料理されて夕食の膳に上ると主從三人は基督の名を稱へて談笑の裡に食を終へる。斯ふ云ふ樂しい生活を細々と認めてローマに居るペトロニウスへ送つた。ペトロニウスは莞爾として微笑したが何も云はない。

それから數日を經て或る晴れやかな日であつた。ペトロニウスは饗宴を開いて知名の賓客を招いた。其席上でローマ帝國の滅亡を說いた。驚嘆の眼を張つた賓客の前で醫師を近づけ自分とユニセとの腕に毒を注射したが哀しげなる樂の音に誘はれて永遠の眠に就いたのである。

ローマが享樂に耽つて居る間に邊境の守は漸く崩れて來た。詩人として悲劇を嘔歌したネロ皇帝もやがて逝つた。華かやなりし大巷小巷は慘風慘雨にくれて七つの丘は暗雲が低く垂れた。たゞバチカン山の頂上ペテロの禮拜堂には燦たる光と共に永遠の響が傳つて居る。クオ、ヴアヂス、ドミネ。

何處へ行く 終

大正三年八月廿五日印刷
大正三年八月廿八日發行

(定價金拾錢)
(郵稅金貳錢)

著者 桑山益二

發行者 赤城正藏
東京市麴町區三番町五〇

印刷者 中田福三郎
東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 秀英舍第一工場
東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

アカギ叢書
第四十九編
何處へ行く

發兌元 赤城正藏
東京市麴町區三番町五〇
電話番町二二八〇番
振替口座東京一〇四三二

賣捌所 全國各書林

日本の平明

アカギ叢書 特色

ムラクレ簡潔

○紳士の標準智識○

1. 古今東西の科學藝文中紳士の標準智識たるべきものを衆取し解説せり

2. 從前の刊行物の高價、尨大、難澁なるが爲めに當然辨知し置くべき著述なるにも關せず止むを得ず閑却せられたるもの多きを憂ひ專ら廉價、平易、簡明に解説し刊行せり

3. 內外の傑作の紹介は簡單にコンデンスしたりと雖妙味に到つては毫も減殺する所なし

○世界學術の叢淵○

◀各冊價に金拾錢也▶

アカギ叢書

毎月數篇逐次刊行

（定價金拾錢 郵稅各貳錢）

○第一編 歐洲文藝 イブセン原作 村上靜人編 ▲人形の家（一名ノラ）▼

○第二編 哲學叢話 中島文學士編 ▲プラグマチズム▼

○第三編 歐洲文藝 ダヌンチオ原作 日野月文學士編 ▲廢都（劇に現はれた女性改題）▼

○第四編 社會學叢 ルボン原作 葛西文學士譯 ▲群衆心理（上卷）▼

○第五編 歐洲文藝 ドストイエフスキイ作 ▲痴人▼

○第六編 歐洲文藝 村上靜人著 ▲ウエデキント と其著作▼

○第七編 哲學叢話 三浦文學士篇 ▲ベルグソンの哲學▼

○第八編　歐洲文藝　オスカア・ウワイルド原作　村上靜人譯　サロメ

○第九編　哲學叢話　中島文學士編　オイケンの哲學

○第十編　博物叢話　寺尾理學士編　ダーウインの進化論

○第十一編　日本史談　龍居文學士著　文政文化江戸の世態

○第十二編　歐洲文藝　フライタッハ原作　齋藤文學士編　喜劇新聞記者

○第十三編　歐洲文藝　スチヴンソン原作　齋藤文學士編　壺の鬼

○第十四編　歐洲文藝　トルストイ原作　村上靜人編　復活

○第十五編　歐洲文藝　（絶版發賣禁止）　レディースマン（一名ベラ、ミー）

○第十六編　美術叢話　佐々木文學士著　奈良の美術

○第十七編　歐洲文藝　モーパッサン原作　村上靜人編　女の一生

○第十八編　歐洲文藝　メーテルリンク原作　村上靜人編　モンナ、ヴァンナ

○第十九編　日本史談　龍居文學士著　日本建築史要

○第二十編　社會學叢　ルボン原作　葛西又次郎譯　群衆心理（下卷）

○第廿一編　美術叢話　桑山文學士編　支那の美術

○第廿二編　歐洲文藝　板垣文學士編　ワンダー、ブック

○第廿三編　歐洲文藝　ストリンドベルヒ作　村上靜人編　父

○第廿四編　歐州文藝　沙翁作　村上靜人編　ハムレット

○第廿五編　歐洲文藝　ダヌンチオ作　日野月文學士編　全譯ジヨバンニ（上卷）

○第廿六編　歐洲文藝　全　▲全譯ジョバンニ（下卷）▼

○第廿七編　歐洲文藝　ダンテ作　村上靜人編　▲神曲▼

○第廿八編　日本史談　龍居文學士著　▲鎌倉の史話▼

○第廿九編　歐州文藝　ヘッペル原作　板垣文學士編　▲ユーデット▼

○第卅編　歐州文藝　ピエトロ・コッサ作　黑田文學士編　▲皇帝ネロ▼

○第卅一編　禮節叢話　獨逸大使館員　前田不二三著　▲歐洲禮節▼

○第卅二編　歐州文藝　イブセン原作　村上靜人編　▲海の夫人▼

○第卅三編　宗教叢話　東北大學講師　佐藤正編　▲オイケンの宗教思想▼

○第卅四編　地理叢話　マルコポーロ原作　佐野文學士編　▲東方見聞錄▼

○第卅五編　歐州文藝　トルストイ原著　葛西文學士編　▲モーパッサン論附ドストイエフスキイ▼

○第卅六編　歐州文藝　ストリンドベルヒ作　島田青峯編　▲絆▼

○第卅七編　歐州文藝　トルストイ原作　村上靜人編　▲暗の力▼

○第卅八編　歐州文藝　ショウ原作　島田青峯編　▲武器と人（チヨコレツト兵隊）▼

○第卅九編　歐州文藝　イブセン原作　村上靜人編　▲鴨▼

○第四十編　歷史叢談　文學士　小林愛雄著　▲神話と傳說▼

○第四十一編　歐州文學　ズーデルマン作　葛西文學士編　▲マグダ（故郷）▼

○第四十二編　歐州文藝　ドストイエフスキイ　加藤朝鳥編　▲虐げられし人々（上卷）▼

○第四十三編　歐州文藝　ツルゲニエフ原作　栗原文學士編　▲初戀▼

214
270

頒布部數數十萬を越へたる

赤城叢書既刊目錄

○第四十四編 演藝叢談 文學士 小林愛雄著 ▲西洋演劇史▼

○第四十五編 歐州文藝 フロオベル原作 畑文學士編 ▲サランボー▼

○第四十六編 音樂叢話 小山文學士著 ▲日本淨瑠璃史▼

○第四十七編 歐州文藝 モーパッサン原作 半田文學士編 ▲ピエル・と・ジアン▼

○第四十八編 歐州文藝 ダヌンチオ原作 日野月文學士編 ▲死の勝利▼

○第四十九編 歐州文藝 シュニツイツチ作 桑山文學士編 ▲何處へ行く▼

○第五十編 歐州文藝 ドストイエフスキイ 大井文學士編 ▲罪と罰▼

○第五十一編 歐州文藝 ドオデエ作 黑田文學士編 ▲サフオ▼

終